

Blowers 1 2



慶祝

1992. 9. 7. BY RINA.T.

乗 船 口

- | | | |
|----|--------------------------------------|-------------------|
| 3 | Mental Ranger | 文・長船吉光
絵・ただのりな |
| 7 | 学園PBM真鶴学園風雲録 全体リプレイ
真鶴レポート | 岬当麻 |
| 23 | Damyan=Kizaki's Road of The Messiah. | Damyan=Kizaki |
| 36 | 《三等雑居室》 | |
| 38 | 冬コミレポート | 菊地研一郎 |
| 40 | 迷想擲弾症候群 | 紺野紫楼 |

※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み200円）が必要です。今回は2/10までにアクションを送って下さい。
※「PEACE PRESSER MAYA」は、新しいイラストレーターとの交渉中です。運が良けりゃ漫画化できるかも知れません。（期待せずに待て!!）
※「LOOK OUT!」は筆者多忙のため、休載いたしました。
※「Damyan=Kizaki's Road of The Messiah.」は今号で完結です。

☆ネットゲーム（ホビー・データ）参加者の皆様へ
今までの郵便代割引サービスは、今後は中止させていただきます。

船 長 室 by 本居こじ

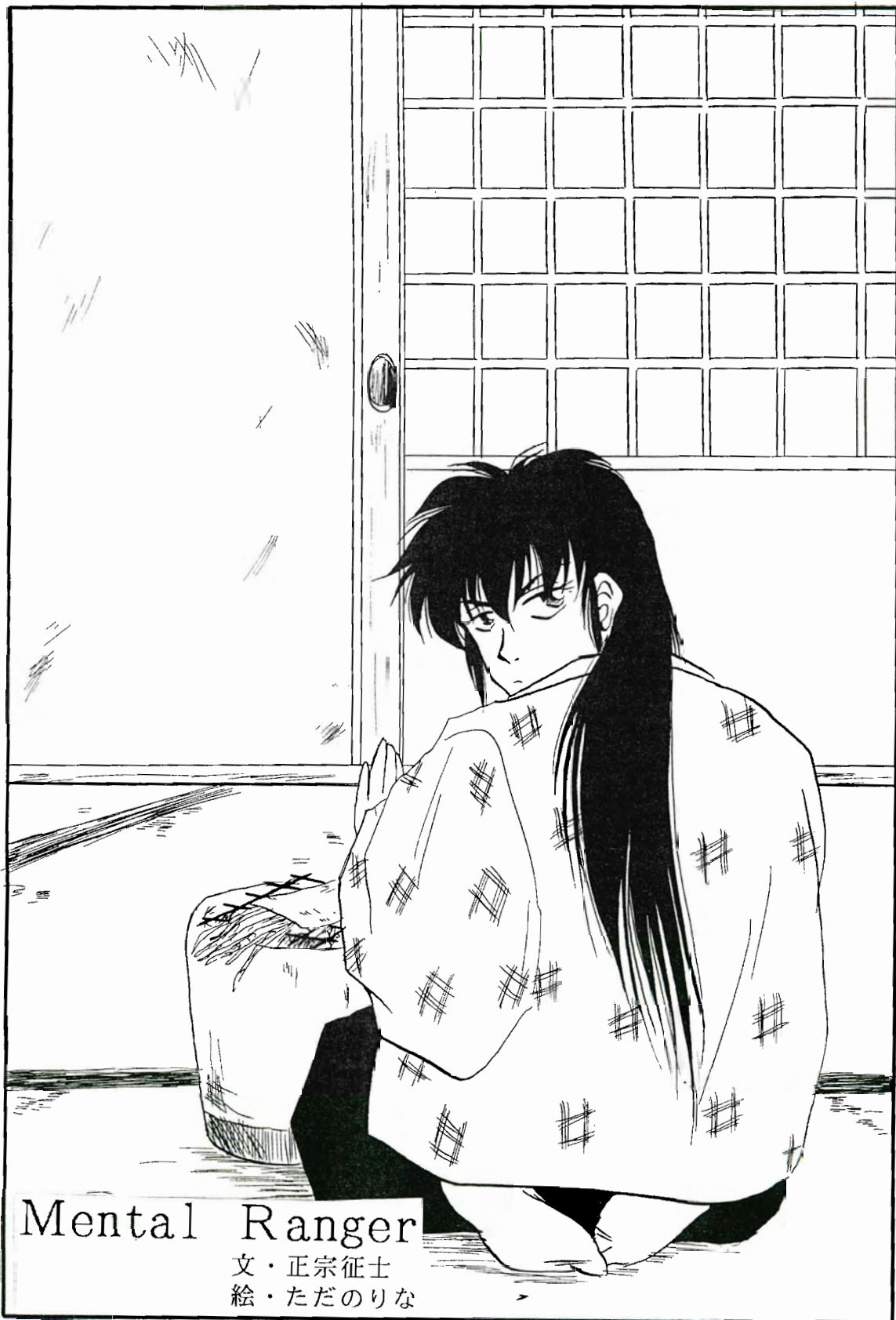
明けましておめでとうございます。大変長らくお待たせいたしました。

さて……とうとうやっちゃいましたね。え？いや、もう去年の暮れの話ですけどね、とうとうストIIで逮捕者が出たでしょ。私なんかはこの類似ケースなんか前っからあって、うやむやに揉み消されてただけだと思うんだけど……。一応、朝日の夕刊に出てた記事を切り抜いて、三等雑居室あたりに付けときます。コピーが汚いのは勘弁。できればこの件に関する「ストIIマニア」の意見が欲しい。優先的に「雑居室」に載せようと思うので。

大体、私が「ストリートファイター」シリーズを努めて攻撃する理由は、こうした事件を誘発し易い設定である点の一つ。言ってみりゃ「ハロウィン強盗」現象にも似たようなもんです。仲間うちならジョークで済まされちゃうし、そうでなけりゃ単なる迷惑。言い過ぎなのを承知で敢えて言うなら、「毒になっても薬にはならない」「毒にも薬にもならない」のとは訳が少々違う。願わくば、これでPTAが「ストII排斥キャンペーン」を展開して、好い加減コミケからホコ先を外らしてくれないかな。……あ、でもコミケにもリュウとか春麗のコスプレやる連中は結構いるから、結局火の粉は降りかかってくるのか。

やれやれ。どうしてこう、みんな「ルール」をわきまえらんないかな。ゲームで負けたから殴りかかるってのも言語道断だけど、いい気になって他人相手に5連勝もする馬鹿も馬鹿。大方お互いムキになってやってたんだろうな。こういう手合いがいるから、台の回転が悪くなるんだよな。でケンカになって、あーやだやだ。

……でも、勝った奴はどうせリュウ/ケンだったろうからいいとして（ダッシュ春麗で5連勝はまずキツだろう）、負けた奴は何使ってたかね。ダルだったら笑うなあ。「腕伸ばしてキュウ」。リュウ/ケンで負けてりゃ、こりゃもう豆腐に飛び込むしかないんだろうけど。



Mental Ranger

文・正宗征士
絵・ただのりな

(前回までの粗筋)

誘拐事件が多発していた。町の僧侶ラングレーは魔界の使者ダイクマの仕業と断定、魔界人退治の経験が深いミラマーに対処を依頼した。犠牲となった子供たちが、魔王に供される新月の日まで、あと数日を残すのみである。しかしラングレーの話では、対策はまったくないという……

8 (承前) : 「……弱りましたな」

ミラマーも弱りきった顔で答えた。対策がないのでは、いくら悪魔たちとの戦いに慣れた彼女といえど、対策がないのでは手の施しようがない。察したラングレーは、気休めめいたことを口にした。

「……正確に言えば、あまり知られておらんだけかも知れん。何しろ滅多に人界へ姿を見せんでな。普通は自分が育てるために一人つかまえば、あの世へ行ってしまう」

「では、なぜ今回は……？」

「わからぬ」ラングレーは腕組みして、深々と溜息をついた。「……とにかく、一人つかまえば、あとは適応できずに死ぬか、発狂するまでは絶対に出て来ん」

「生き延びる例はないのでしょうか？」

「まず、ない。人界と魔界の環境は、子供が適応するには酷なほど違いすぎる……我々のように修業を積んでおれば話は別だが、それでなければ一週間と無事ではおれまい」

今度はミラマーが溜息をつく番だった。思い空気が、更に重く感じられる。

「考えようでは……哀れな話ですな」

「確かにな」ラングレーはあごを撫で回した。「根本的な対策は成仏させることだが、何分にもどうすれば成仏するか、それがわかからん。並みの方法では不可能だったらしい」

「……それにしても厄介な……」

二人はしばらく黙かなかった。やがて日が暮れかけたころ、夕刻の務めのためにミラマーが辞する段になって、ラングレーは再び口を開いた。

「本山に行けば、ダイクマの資料が細大漏らさず残されているはずだ。……

無論生前のこともな」

「……恩に着ます」

彼はまじめな顔でゆっくりうなずき、そして、付け足した。

「礼は事が済んでからでも、遅くはあるまい」

9 : 夕刻の務めを終えるとミラマーは、そのまま本堂で禅に入った。恐らくはトビリシの時のように力押しではなく、説得が主になると思われるからだ。説得する側に心の動揺は禁物である。精神を一つに、もっと言えば心をまっ白にする必要があった。

坐禅は夜を徹して続けられ、翌朝も朝の務めを間にはさみ、休みなく続けられた。その様はあたかもダイクマのことが頭に無いかのようであったが、実際にはそのことだけで頭が一杯になっていたのである。

日が明けるとキサラは医者ラングに会いに行った。主に助力を請うつもりだったが、流産の事など、ダイクマにまつわるキーワードについて、アドバイスも欲しかった。

「……流産、ね」いつもの癖で、ラングは鼻を膨らませた。「そいつは少し厄介だ」

キサラは目を白黒させた。出産経験は勿論のこと、恋愛経験すら皆無の彼女にとっては、そもそも流産がどんなものなのかも見当がつかない。魔術士は物心がつくかつかないかのうちから修業を積むのが常で、それ以後一人前と認められるまで師匠の下で隔離同然の生活を送るから、異性と交流する機会など零に等しいのである。肉親と面会することも、普通は不可能である。一般に魔術士は社会性に乏しいとされる所以である。

その辺の事情を察したラングは、解説を進めた。

「流産というのは、死産の一つだ。胎児が未熟なうちに、何らかのショックによって出産してしまうわけだ。

—————ショックは何でもいい。心因性、外因性……それによって母体に何らかの異常が生まれて、胎動が始ま

ってしまうことによるものだからね。妊婦が馬車に乗っちゃいけない理由は、それだ。下手をすれば振動だけで流産する可能性もある」

「狂気との関係は？」キサラはこらえきれずに結論を急いだ。「その、具体的には子供を誘拐したり…魔王と結託したり…」

「ダイクマか？」ラングの確認にキサラが無言でうなずく。「…あいつ流産歴があったのか」

しばらく首をひねって考え込んでいたラングは、やがて呟いた。

「こりゃエラく厄介だな。…ラングレー先生の話だけでは細かいことは判らんが…俺は、そういうことなら、ダイクマは出産直後に死んだのと違うかと思う。結果、子供への執念と現世への執着が絡んで…それで亡者になったんじゃないだろうか。そこを、魔王につけ込まれた。誰か他の人物の肉体に憑着させて、子供を漁らせる…大体、そんな筋書だろう」

一気に喋ったラングは、そこで一息入れた。



「多分、ダイクマ自身は、魔界は訓練されていない現世の人間が住むことはできない環境だということを、知らんのだろう」

「それじゃ、魔王は何の得をするんです？」キサラはふと思った疑問を口にした。「連れてきた子供は、ダイクマが育てる。これを食べたんじゃない、ダイクマを手なずけるのはムリのはず。別に魔王には得がないと思いますけど？」

ラングは目を丸くしてキサラを凝視した。

「お前、ミラマーのところに何年いるんだい？魔王は人の恐怖、悲しみ、苦悩、そういったものを糧にしてるんだだろうが。その辺はそっちの方が専門じゃないか」

「じゃ、今回のケースでは…」

「子供の苦悩。こっちの世界の恐怖。

そしてダイクマの悲しみ。得だらけだ」

「じゃ、それをダイクマに納得させれば…」

「簡単に言うがな」

一度は光明を見出して安堵したキサラであったが、ラングの複雑なままの表情から一言で、再び緊張した。

「今まで1足す1は3だと思い込んできた子供に、正解は2だと教える作業を考えてみよう。しかも、相手はこちらに敵意を感じている……一筋縄には行かんよ」

「……………」

キサラは呆然となった。ラングは座ったままクルリと向きを変え、机の奥の窓から外の野原を見渡した。

しばらく無言の時が続く。

「それに、どう成仏させるかだ」

ラングにとっては何でもなし論理展開のつもりだったが、キサラにしてみれば鋭い追い討ちにも思えた。

「俺はそっちの方面にはあまり詳しくないが、やり方は山ほどあるんだろう？……実を言うところだけの話、俺はダイクマに同情してもいるんだよ。彼女は決して悪人じゃない。やっていることは犯罪だが、彼女は彼女なりに善意で動いていると思う。何があっちであったかは知らんが、恐らくそうした方がその子にとって良かれと思って、それでさらってるんじゃないかな。……そういうのを成仏させる話ってのは、聞いたことがないねえ……」

キサラは救いを求めるような顔つきで、ラングをみつめた。若い医師は意識的に目をそらし、締めくくりに入った。

「今回は、ミラマーの話術一本だと思うよ。お前さんは裏方に回った方がいいだろう……」

キサラは礼を言うと、静かにその場を辞した。

「ラングはそう言ったか……」ミラマーは夕食後の坐禅のさなか、キサラの方から持ち込まれた話を聞いて、自分に含むように呟いた。「そういう見方もできる……か……」

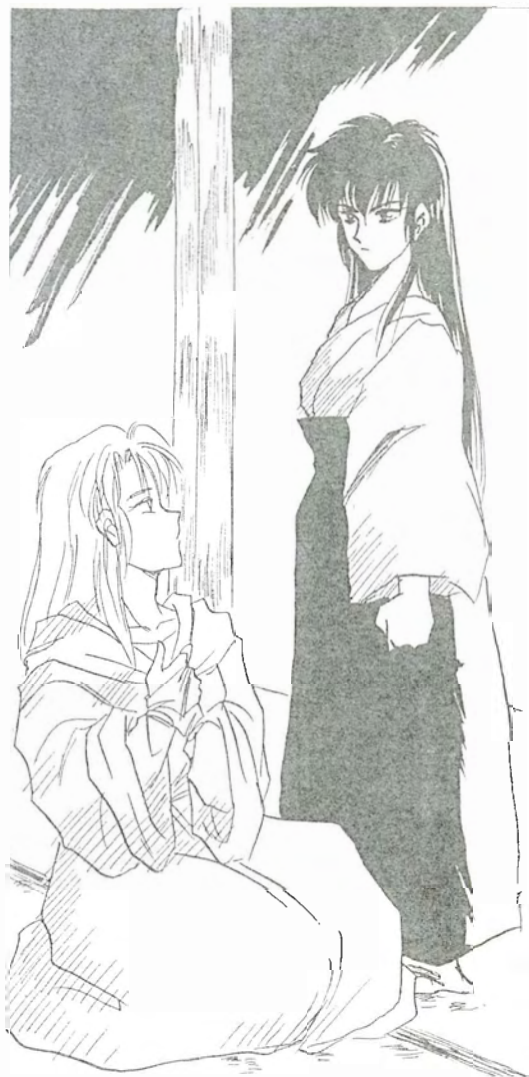
ラングの言葉が頭にあるキサラは、何も言わずにただ待っている。それはミラマーもわかっていたが、坐禅中の彼女にとっては、そのことも流されて

行く思念の一つにすぎなかった。感じたこと、思ったこと、その他すべてに捕らわれず、流れるに任せるのが、坐禅なのである。彼女の宗教の修業の一つだった。「～しながら」というのは慎まなければならない。

一時間たち、二時間経った。いつしか日は完全に沈み、欠けた月が低く姿を見せていた。

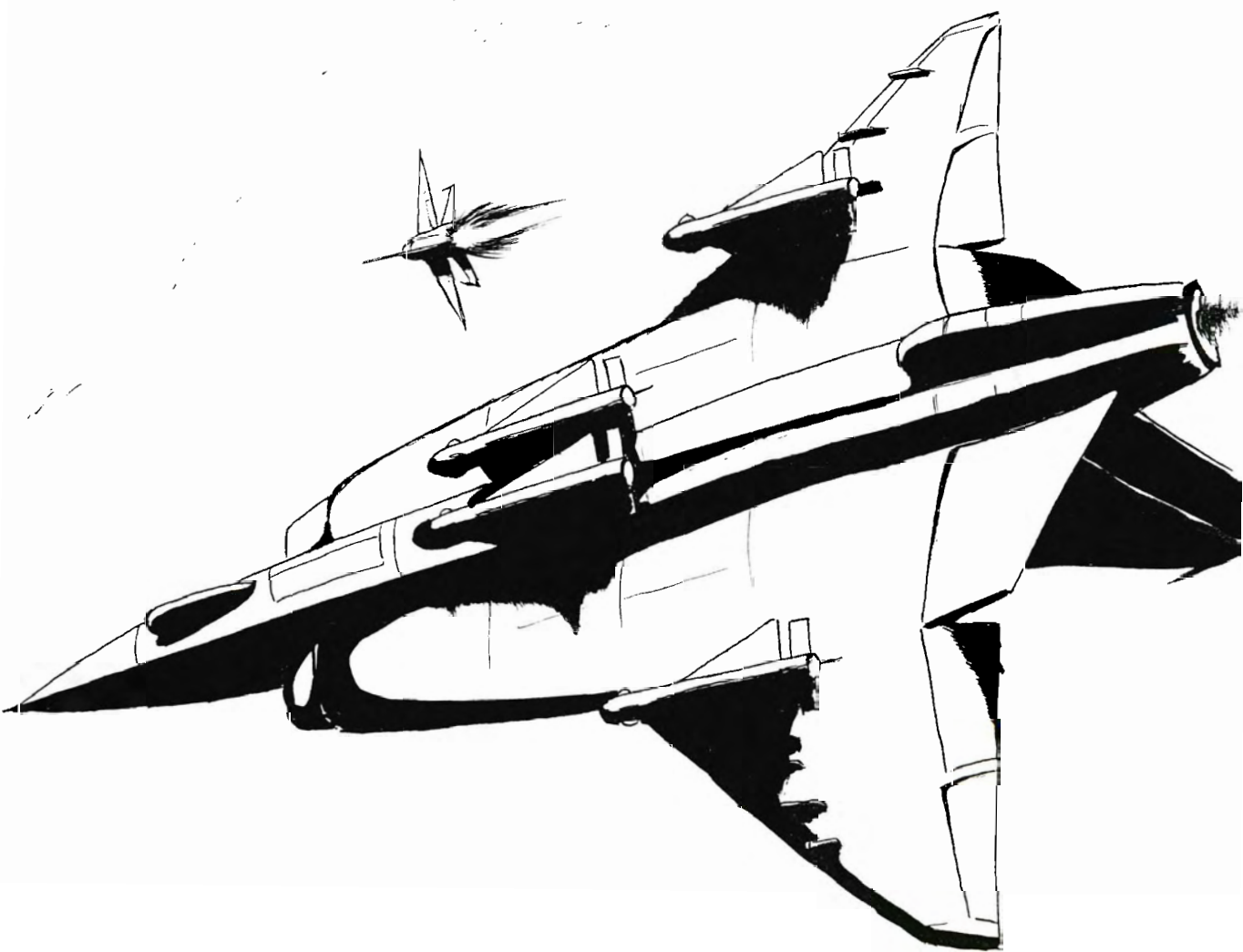
おもむろにミラマーは立ち上がると、まだ横に座っていたキサラに告げた。

「魔界へ行こう……すべての答はそこにある」
(続)



学園PBM「真鶴学園風雲録」リプレイ

真鶴レポート



立花陽明は、放課後ずっと図書室にこもりきりになっていた。勅使河原が、何故わざわざこんなところまでミサイルを持ち込んで、クーデター騒ぎを起こす必要があったのか。その理由が彼にはいまいち理解できなかったのだ。そして5月も後半に入ったある日、彼は遂に謎の鍵を手に入れた。恐ろしく古びた和綴じのその本には、概ね次のようなことが書いてあった。

大震災の直後、真鶴中学を永平寺の監督下から乗っ取ろうとした一派があった。彼らの陰謀がいよいよ現実のものとなりかけたその時、生徒たちの何人かが釈尊の悟りに目覚め、彼らの野望を打ち砕いた……

なんとなく、現在真鶴学園が置かれた状況に似たものがある。あるいは当時の文芸部員が著わした、山とある伝奇小説のうちの一つだろうか。この学校の図書館には、そういった「ヘン」なものまで大切に保管されているのである。そのくせまともな分野には欠落が多いなど、妙なクセがある。立花は奥付けを確認してみようとした。が、誰かがはがしてしまったのか、あるべき場所には黄ばんだ糊のしみが残っているだけだった。

奇妙なその「資料」のことを、彼は頭の隅に留めておくことにした。

初雁つばめが「宿舎」と成り果てた自分の乗艦「鳥海」の艦橋で、その日の宿題に取りかかっていた時のこと。菅原絵馬が、不意に尋ねてきた。鳩山平和を連れてくる。この頃は女子部艦の中に男子がくることにも慣れてしまって、誰も彼らに特別の注意を払うものはなかった。

「何かこのフネに用？」座ったまま、気さくな調子で初雁は話しかけた。「出港するのはダメだけど、他のことなら話は聞くわよ」

「……ちょっと、協力してもらえるかな？」

その後話された菅原の「計画」を聞いて、初雁は彼の度胸に呆れ、また感心もした。

同じころ、井村真知子の「まや」艦上……

有明みどりはいつも通り、電子機器ととっ組み合っていた。何とか敵のECMを除去しつつ、外部と通信できないかに挑戦していたのである。そして彼女は「怪電波」をヒットした。

「……………なみんなにお知らせ！『模型部活動やらせろデモ』は今週金曜日、午後3時半に男子部正門前から！ほな、ここで曲。ちっと古いけど、学園天国でどうかな？」

果たして、スピーカーからはちゃんと「学園天国」が流れてきた。

「ちょっとお、マツちゃあん！」

有明は艦橋で「まや」の性能アップ策について考え込んでいた井村真知子を、大声で呼んだ。井村は聞き慣れない歌を耳にして、不思議そうな眼差しを有明に向ける。

「ECMについて調べてたのよ、そしたらこんなのが引っかかってさあ」

この時、有明は珍しく操作ミスを行っていた。彼女がヒットした放送は、実は校内放送だったのである。接岸中につながる通信ケーブルの方の回線を探索していたのだが、この場のだれ一人として、そのミスには気付かなかった。井村が校内放送用外部スピーカーのスイッチを切ってしまうていたせいもある。

女子部校舎の影を、怪しげな影がすばやく走る。他に見ているものがないかどうか確かめてから、注意深く目的地へ向かって機敏に身をこなすその姿は、そこら辺を巡回しているヤクザたちと同じく、アロハシャツ風の崩した身なりをしていた。

夜になってから、春日千明は艦橋に栗田榛名をたずねた。案の定彼女は宇垣と将棋にこうじていたが、構わず彼女は声をかけた。

今回の目的は、榛名を翻意させることである。下手に刺激すると、生徒に死人が出ることになる……それよりは、官憲に全てを任せる方がベターであろう……

一通り聞き終えた榛名は、別段動じた風もなく、逆に説得し返した。

「別にやろうとしてる事がベストだとは思ってないよ。けどね、今回は機動隊だって下手には動けないって。真鶴市民何万の生活も関わってくるから。それよりは内側から揺さぶって、敵の配陣を崩した方が、突入もし易いと思うんだ。……早い話、私たちがやるのは機動隊の突入し易い状態を作ること。後は、あっちの指揮官がどれだけ鋭いか、だけどね」

そんな馬鹿な。失敗したら冗談抜きで死人が出る。春日は思ってからに説得を続けたが、結局議論では勝てなかった。榛名はあくまで、楽観的な見通しを崩さないだけの、確たる自信があるらしい。横で宇垣は終始面白そうに見物していたが、春日が艦橋を降りるまで何も言わなかった。

「役者じゃねえか」宇垣がからかう。「そんな自信、どっから湧いた？」

「んなものあるワケないでしょ」榛名が声をひそめる。「こっちに逃げた時、腹を決めたのよ。ずいぶん悪人になったって、自分でも思うわ」

彼らにしてみれば充分内緒話のつもりだったろうが、静かな艦橋近辺では、春日にもしっかり聞こえていた。榛名も結局人の子なのか。妙なところで納得する彼女だった。

翌日の放課後……

男子部化学室の周辺には、あからさまな異臭が漂うようになっていた。御手洗化学部長のお墨付きを得た沖田悟が化学兵器の実験をしているのは理由の一つにすぎない。もう一人、榊裕が似たような実験を始めたからである。

正に狂気の化学実験。

正規の部員と言えど化学室から半径30メートル以内には人影一つ見当たらない。風下へ向かってはさらに50メートルほども誰もいない。臭気のほとんどは酸性系の刺激臭であった。異状を感じたヤクザたちが突入しようとしたが、ガスマスクなしではとても近寄れる状況ではなかった。ほとんどの場合、肺か頭に激しく刺すような痛みを覚えたからである。しかしそんな中でガスマスクなしで実験に没頭できる二人って一体……。

「沖田先輩！できた！」榊が歓喜の声を上げた。「完成だ！そっちの方はどうです？」

「まあ、大体ってとこだな」沖田は平然としている。「起爆装置ができたのなら、もう9割方完成さ……じゃ、御手洗部長と女子艦隊の栗田先輩に、準備ができたって伝えてくれ」「了解！」

勇んで飛び出した榊だったが、外の空気を吸った途端、めまいを覚え、卒倒した。

約2時間ほど後、彼は真鶴中央病院の病室で酸素マスクを付けている自分に気付くことになる。しかし沖田の方はそんな事とはつゆ知らず、「狂気のケミカル・カクテル」の研究に没入していた。

榊が卒倒すると相前後して、舞台は男子部校舍裏に移る。宇垣麻美は安心して煙草を吸える場所を探して、手下数名とそのあたりを散策していた。……彼女がもう安心と煙草をポケットから取り出した途端、手下が小さく注意を促した。

「宇垣さん、誰かいるっすよ」

「んー？」宇垣は一本くわえながら、彼女の示す方に目をやる。余談だが宇垣の煙草はショートピースと決まっている。言うまでもなく両切りだ。「俺もヤキが回ったかなあ？」

実のところ彼女もその人影の存在に気付いていたが、「同類の臭いがする」と無視していたのである。要は自分と同じ不良だということだが。

「……まあいいさね」

それだけで手下も理解して、めいめいの煙草に火を点けた。彼女らはまだ売られてもいない喧嘩を買うほど、弱腰ではないのである。そして、自分の煙草に火を点けられるのも

好まない。しばらく様々な紫煙があたりにたなびいた。やがて、新しい人影が現れた。

「ん……？」宇垣が興味深げに観察する。「りゃ？坂井じゃんか？」

「あ！」手下が舌うちする。「あの野郎！影山っすよ！どうします？」

「あのバカはなに仕出来すか分からんからな」宇垣は火をかかともみ消した。「てめえら、殴る準備でもしとけ。ちょっと寄るぞ」

しかし、あまり近寄れなかった。影山を囲むように、男子部の生徒が数名いたからである。運良く宇垣たちが見つかることはなかった。

「そのな……どうなんだ」

影山は照れ臭そうに、坂井に声をかけた。早い話、プロポーズの返事を求めているのだ。憎いぞ影山。色男！書いてる本人が背中カユイぞ。

しかし坂井の反応は今一つである。対抗戦でははるなの力になれず、クーデターに対しても何も手を打てず、そういった自分の無力さ加減がショックとなって、かなり尾を引いていたのだ。そんな事など知らない影山のいらだちは増す。

「どうなんだよ……？」

「うん……」

坂井はあいまいに返事した。彼女はプロポーズを拒絶するつもりだったのだが。

その後は急転直下。

影山はやにわに坂井の身体を抱き寄せ、キスをした。どうやらあいまいすぎる彼女の返事を、イエスと早とちりしたものらしい。当然坂井は抵抗しようとして、慌ててスカートに忍ばせてあるコマンダーに手をやったが、手を滑らせて取り落としてしまった。不運。

影山のキスには更に熱情がこもり、××まで入った。坂井からは抵抗する気力も失せていく。……酸欠起こしたのと違うか？……あ！そこ！固いものを投げるなっ！私はこのテのロマンス物は書けないのだっ！ああっ女神様痛い痛い、物を投げないでっ！

……そうこうするうち影山の右手は坂井のセーラー服の背から胸へ這う。と、そこに！

少し距離をおいて、しびれを切らした宇垣の罵声が飛んだ！！

「あ——くそ！じれったくて見てらんねえ！とつと押し倒せ！」

物陰に隠れていた、と言うより影山たちに見とれていた彼の手下たちが、驚いて飛びだしてくる。数は3人。対して宇垣の手下は4人である。まだ半分ほど残っていた二本目のショートピースを地面に叩きつけ、いらいらと爪先でもみ消した宇垣は、あっけに取られている二人に向かって、その場で説教を垂れ始めた。

「まったく、人がいい気持ちでヤニ食ってりゃ、いちゃいちゃいちゃいちゃしやがって……影山！てめえここでパン張るつもりなら、女の一人いきなり押し倒せなくてどうする！しかも手下はべらせやがって……マワシでもするつもりか？」宇垣はなぜか涙ぐみ始めた。

「それに坂井！貴様もハルに対抗する気なら、何でもっとシャキッとしねえんだ！手前のケツぐらい自分で拭けるようになりゃーがれ！キスぐらいでフニャフニャになりやがって……俺なんかなあ、俺なんかなあ……てめえら、さっさと離れねえか！」

その後の愚痴はページの無駄なので割愛する。読者自身の想像力に委ねたい。（はふう）

夜になって「鳥海」の艦橋に、菅原は昇っていった。足取りは緊張のためか不規則になりがちだったが、つまづくことはなかった。

航海艦橋に人影がないので露天艦橋まで上がると、女子部旗艦「酒匂」の前部甲板、46cm砲塔の横あたりで初雁つばめが栗田榛名と並んで寝転がっているのが見えた。夜空の星を見上げ、何か話こんでいるらしい。

いよいよ高まる緊張を抑えながら、菅原は艦橋を降り、「酒匂」の方へ走った。

消灯時間はまだ先のことである。周囲の艦の照明であまりはつきりとは見えなかったが、空には彼女たちの実家より、はるかに多くの星を見ることができた。二人とも横浜の出身なのである。実は、初雁は榛名から、星を使った航法について教わっていたのである。菅

原からは制服の色が砲塔の塗装に溶け込んでいて分からなかったが、他に春日も膝を抱えて座っていた。彼女もまた、艦船の動かし方に興味を抱き始めたのである。初雁の方は純粹にそれだけが目的だったが、春日は他に榛名のボディガードになりたいという希望を満足させる目的もあった。有能な指揮官の手足となって、自分の戦術的な才能を発揮したい。そう思っているのだった。

「……でね、別に北極星はそれほど必要でもないのよ。時計さえ合ってるやね……！」

榛名は得々として自分の航法術を新参の「弟子」に伝えていたが、不意に初雁たちや「酒匂」乗員とは違う気配を感じて飛び起き、振り向いた。春日が振り向いてベレッタを構えるのとほとんど同じタイミングである。

「なァに、菅原君？ビックリさせないでよ」

半分抜きかけたCz75をスカートのポケットに納めながら、榛名は警戒を解いた。二人の身のこなしの素速さに、寝返りを打って首を二人が見た方へ向けるのが精一杯だった初雁は、あっけにとられた。自分とはとてもここまではできない。

「あ、今晚は先輩」編入以来あまり会ったこともないのに名前を覚えていることに内心心を動かされながらも、菅原は要点を伝えることに心を集中した。「初雁さん、例の計画が終わったよ」

「え、もう!?」初雁はようやく飛び起きた。「随分早いじゃん！」

「どうってことないよ、連中主なブツはみんな女子部の校舎裏に集めてたからね。それより変装用のアロハシャツの方が大変だったよ」

菅原は彼女たちのそばにどっかと腰を下ろした。

「榛名先輩。敵の勢力がつかめました。本当は初雁さんに伝えてもらうつもりだったけど、ついでなんで……」

「……でアロハシャツ」榛名は納得したように首を縦に振った。「で、どんな風？」

「かくかくしかじか……」

ヤクザの勢力については前号で示した通りなので、ここでは割愛する。

「わかったわ。化学部からも準備が整ったって言ってきたし、あとはいつやるかね」

榛名の瞳に濃厚な自信の色が湧いてくるのを、春日だけは見逃さなかった。これはこの間説得しに行った時とは違う。「本物」の自信だ。

「ありがとう、菅原君。助かったわ。……麻美と話さないとね」

結局、初雁への航法伝授はうやむやに終わってしまった。

やがて二昼夜の月日が過ぎた。

「こちらロンドンBBC放送……今日、皆様に送る詩はヴェルレーヌの……」

突拍子もないタイミングで、夜中に放送がかかった。声は先日有明がヒットした「怪放送」のものと一緒にある。

「秋の日のヴィオロンのため息の身にしみて ひとぶるに うら悲し……コードはマイナス1やで！みんな、気張りや！」

始まりと同様、突発的に校内放送は止まった。実はこの放送は、放送委員会の早坂理絵が決死の覚悟で放送室に乗り込み、勝手に流したものである。一つめの放送はデモンストレーションとして自発的にやったもの、今回のものはそれを榛名に売り込んで、行動開始の暗号として流したものである。ヴェルレーヌの詩は第二次大戦時に連合軍が、「ノルマンディー上陸戦開始前日」の暗号としたもの。コード-1とはこの古事より予定日が1日繰り上がる、つまり今すぐ動けということになる。

榛名たちの予期に背かず、まず宇垣一派が行動を開始した。校内の要所要所で、巡回のヤクザたちに集団で殴りかかったのである。さすがに1対3以上の多数を相手にすると、ヤクザと言えど一溜りもない。

「何やキサマらァ！」

「ってんでえ、くたばれ！」

そんな怒号があちこちでし始めると、他の生徒たちも連鎖的に行動を開始し始めた。

まず沖田が、「遅れてはならじ」と部屋に貯蔵していた化学薬品を持てるだけ抱えこみ、寮の自室を飛び出した。しかし彼が男子部主港のゲートエリアに駆け付けたころには、そこは一大銃撃戦の場となっていた。ゲート管制室をふさぐヤクザたちと、これを奪還せんと攻撃する生徒たちが、それぞれ思い思いの武器を手にして戦線を構成していたのである。生徒側の武器にも発射炎を吹くものが散見されるのは、恐らくヤクザから略奪したものなのだろう。全体として生徒側有利である。さらにそこへ、沖田はプラスチック製の白い薬瓶を放り込んだ。地面にぶつかる寸前にそれは「バカン」と割れ、周囲のヤクザたちをなぎ倒した。生徒たちも何人かが倒れる。爆発した「物体」は更に細かく分裂しながら破裂を続け、あたり中にシュウシュウ音を立てながら破片をまき散らした。

「いいぞ！オレはこれを求めていたんだ！」

感極まった沖田が涙を流し、拳を握り占めて絶叫する。…だが、彼はすぐに流れ弾を受けて悶絶した。しかし弾はテロ鎮圧用のゴム弾だから大丈夫。テロリストがテロ鎮圧用弾とは皮肉でもある。

沖田がやったのは、編入時にやり損ねた「金属カリウム爆発」の拡大版である。もちろん爆発した「物体」とは金属カリウムである。急速に水分に触れたカリウムは高熱を発生しながら四分八裂し、その弾けたかけらがまた水分を吸って破裂するという、アレである。しかも体内に飛び込んだ分は体内の水分と化合して更に破裂を繰り返す。まさに悪夢のような化学反応である。へたをすれば瓶が沖田の手を離れるより前に反応が始まりかねない、危険な「賭け」だったが…あの時御手洗化学部長が予言したとおりの修羅場が、そこには現出されていた。そしてその後の展開に若干の遅れを生じたことは、否めない。

一方、女子部。人の行き来は自由であったとは言え、やはりヤクザが巡回している中の移動は気が引けるともあって、この反テロ・テロ（ややこしい）についての情報は皆無に等しかった。宇垣一派の者たちも最低限が残っただけで、目立った活動を起こすまでにはいたらない。それでも、男子部の方から聞こえてくる喧騒は、徐々に彼女たちを動かすには充分だった。

手に手に得物を持って集まってきた女生徒たちが、トマホーク死守に回ったヤクザたちとの間に戦線を張るまでも、それほど時間を要さなかった。この辺は模型部活動の効果大である。朝比奈美雪は混乱に乗じて弓道部室から弓矢一式を抱えてきて、ヤクザたちを狙撃にかかった。ただ傷を負わせるのは好まないの、ぎりぎりすぐそばを狙うことになる。ある意味、ヤクザたちのゴム弾よりも怖い。下手に当たれば致命傷になるからだ。

「御国ノ興廃カカッテコノ一戦ニアリ各員一層奮励努力セヨ」

榛名の乗艦「酒匂」の艦橋からはそういう文面の（皇国を御国に変えたのは、榛名なりのパロディである）旗信号が流されていたが、この晩は月に雲がかかっている、回りからは良く見えなかった。榛名がこの晩を蜂起決行日にしたのも、実はそのためである。

しかし沖田が結果的にゲート管制室の入り口をふさいでしまうとは、計算外であった。ホースから勢いを付けた水で押し流すまでに要した労力は並大抵ではない。そしてその間、ヤクザたちの増援を押し留めなければならないのである。今度はこちらが守る側に回った。予定では速やかにヤクザを沈黙させ、増援が来ないうちに船を出すはずだったのだが…。5つある防波堤を兼ねたゲートを開けないと、外海には出られないのだ。別動隊が、今頃は女子部のゲートを確保していることだろう。今回の主力は彼女たちMSではなく、縮小機を通らずにそのまま女子部へ殴り込む、MAやMFの者たちである。それ以外の点では、今回対抗戦で女子部が取るはずだった作戦そのままである。男子部の艦へは、戦術コンピューターのデータリンクで情報が回されていた。

やがて、女子部ゲートを攻めていた班から電信が入った。

「トラ　トラ　トラ」

ゲートは確保されたという暗号である。しかしたかが中高生に翻弄されるヤクザ達って一体……。

この頃になると、市内巡回に充てられていた組員達も、徐々に学内の混乱鎮圧のために投入され始めた。こちらは実弾装備である。勢力比は大きくヤクザ有利に動くはずだったが、そううまくは問屋が下ろさない。市境付近で待機していた機動隊の指揮官は、敵の動きがおかしいのにいち早く気付き、また沖合警備の巡視船から「断続的な銃声が聞こえる」という報告もあって、すぐに決断した。

「全隊ただちに市内へ突入ーッ！」

「泣く子も黙る第6機」をはじめとする警視庁機動隊の猛者連、お膝下の神奈川県警、応援出動の静岡県警察・山梨県警・千葉県警などからなる「多国籍」機動隊が、手際良く灰色の装甲バスに乗り込み、次々に真鶴市街へ突入していく。それは軍が迷彩のトラックでやるより、威圧的で勇壮でさえあった。

女子部の縮小機ゲートを守っていたヤクザ達は、突如背後から殴りかかってきた生徒達に、浮き足だった。まさかそんな所から来るとは思わなかったのである。それはそうだ。何しろ彼らの「正面」にいる生徒達だけでもそれなりの量にのぼっていたのだから。

背後から現われた生徒達こそ、男子部から海路で突入してきた、榛名率いる「増援兵力」である。今回の揚陸作戦に特に戦術的な意味はないのだが、「奇襲」による心理効果に主たる目的があった。あとは「何を考えているかわからん」という攪乱も期待できる。

今や戦況の推移は、若干遅れを見せつつも榛名の予定通りに進んでいた。

「はい！こちらは放送委員の早坂理絵、激戦のトマホーク前に来ています。ただいまこちらでは、男子部からやってきた増援を加えて、一層激しさを増しています！……おっと、本部棟の方からヤクザの増援が突入して参りました。装甲車数台に分乗しています。これは卑怯！生徒側、手も足も出せずに散りはじめました。……うちも危ないので場所を移します。……と、見事！弓道部の朝比奈さん、敵装甲車のタイヤに弓を当てました！パンクです。攔座しました！クリティカルヒットです！続いて一台、どうしたんでしょう、いきなり止まりました。……どうやらエンジン関係のトラブルの様です。グリルから煙が出ています。……いや、火を吹いた！装甲車が火を吹きました。一体どうしたのかヤクザ軍。……アーッ！生徒が奪った銃の中に、実弾入りのものがあった模様です！これはシャレ抜きに危ない！みんな、重々注意しいや！……」

早坂はドサクサに放送室からハムを持ち出し、誰にともなく中継を始めていた。放送は遠く稚内のあたりまで届いていたことが確認されているが、とりあえず今は関係ない。

「……さて、うちは本部棟裏口へやってきました。本部棟を押さえれば、女子部側の校内放送は完全に掌握することができます。ところで、男子部側の校内放送はどうなっているのでしょうか。もしできるんなら、男子部だけでもこの中継をつないで欲しいと思います」

男子部どころか、この短波をキャッチしたTVKテレビ神奈川が臨時放送で全县に流し、NHKや一部の民放も、警官隊の突入をレポートすると同時に全国ネットで放送していた。

「……おっと！学食の方から、憤怒に燃えた雄叫びが聞こえます。“勅使河原はどこだ、勅使河原はどこだ”……宇垣先輩です！般若もかくや、逆上に顔を朱に染め、木刀から血を滴らせて、今、宇垣先輩以下数十名がヤクザの群れに突入！すごい！ゴム弾の直撃にも動じません！真鶴のワルキューレです！ヤクザどもがなす術もなく次々料理されていく！」

宇垣の手にしてきた木刀に血が付いているのは事実だったが、滴るほどではない。こんなことを全国ネットで放送された日には、いかに宇垣と言えども当分表は出歩けない。

「さて、あつという間に本部棟の関門は突破され……あ！ようやく機動隊の到着です！グレーの車体に赤いランプ、間違いありません！今バスの扉が開いて、出て参りました！ジュラルミンの盾と櫂の警棒を連ねて、生徒を押しおのけ、警視庁機動隊のの猛者が女子部本

部棟へ続々突入一っ！あや？…今気がつきました。バスのナンバーは『神戸』になっています。ということは、兵庫県警だ！あの、対山〇組戦でもっとも対ヤクザ戦に熟達した兵庫県警です！危うし銀龍会！絶体絶命です！手元の情報では銀龍会は赤坂に本拠を持つとのこと、これは正に東西対決、宿敵同志、武蔵対小次郎、信玄対謙信、ゴジラ対モスラ！頑張れ関西人！納豆は人間の食い物ちゃう！」

堺出身の早坂は、機動隊が神戸からの応援隊であると知って、ますますエキサイトする。古〇伊〇郎も真っ青の早口でどんどんまくし立てて行く。放送が天職なのだろうか。

機動隊が突入した後へ、宇垣たちが続く。先頭に行く彼女は、2階の踊り場で、失意と驚愕に腰を抜かして座りこんでいた白根こだまを目にすることになった。彼女は新たに現れた「殺気」の集団に、ただあごを震わせ、目を丸くするばかりだった。後ろ盾を失った小役人の、哀れな末路を象徴するかのようだ。

宇垣が歩み寄り、肩をつかみあげる。

「早く逃げろ」彼女は白根にニヤリと不適な笑いを投げかけた。「ここは戦場になる…」

放水が始まった。頭上の方では銃撃戦も始まり、窓ガラスがたて続けに割れ、今までの小競り合いがほんのお遊びにすぎなかったことを、全員に意識させる。

「何だお前たちは！」

後続の新しい機動隊員が、学生服を見咎めて怒鳴りつける。当然と言えば当然だ。

「早く逃げろ！危ないぞ！」

「他に生徒はいるか？」

宇垣の問いに白根はあわてて首を横へ振った。

「…でも委員長と勅使河原が！」

「よし、てめえら、ずらかるぞ！」

宇垣は白根を肩にかつぎあげると、手下たちの後ろから全速力で走りだした。

「…再び私はトマホーク前にやってきました。と言っても危ないので、少々離れたところから、木陰に隠れての実況です。攻勢は生徒から機動隊にスイッチを済ませているようですが、ヤクザの勢力は今だ元気です。しかし何故、未だにトマホークを一発も撃たないのでしょうか？あるいは撃てないのか？…あ、今判明しました。コントロールパネルらしい部分に弓矢が3本ばかり突き立っています！今までまったく気がつきませんでした。朝比奈さん、お手柄！…いや他の弓道部員かも知れない。もしそうだったらこの場を借りてお詫びします。すんまへん。

さて、気を取り直して…おや？トマホークの尾部から煙が…ヤクザたちは気付いていないのか！まったく銃撃を止めようとしません！このままではブラストに巻き込まれる！もしかしてこれは、流れ弾がロケットモーターに点火したのか？危険です！アーッ！今、一発が空へ舞い上がりました！ヤクザたちが白煙に包まれる！絶体絶命か？あのトマホークはどこへ飛んでいくのでしょうか？…あ、海の方から光の筋が…見事トマホークに吸い込まれる！撃墜です！…お見事、海上保安庁！提督先輩によると船名は「のじま」だそうです。実際は何でしょうか。そして今の光はただの曳光弾か、それとも秘密兵器のレーザーガンでしょうか？」

無責任もいいところである。この頃に、神奈川県警のヘリコプターが上空に飛来して、拡声器で放送した。

「こちらは神奈川県警本部捜査4課だ……貴様等の親玉は逮捕された……これ以上の抵抗は無意味だ、今すぐチャカ捨ててお縄に付け！」

徹底抗戦の意思表示か一角からチャパレルSAMが打ち上げられる。トラックの荷台に発射ユニットだけを搭載した代物だ。白煙を曳きながら、それはヘリに見事命中……しかし、それを潮に、ヤクザたちの抵抗は尻すぼみになりつつあった。

実際この頃までには勅使河原規子は逮捕され、三河法子風紀委員長も補導されていた。事態は急速に収束へ向かい、夜は明けつつあった。

「これで済んだと思うがいい」東京の本庁へ護送される間、勅使河原は静かに呟いた。「そして、……」

後の言葉は、横についていた刑事ににらまれて、彼女自身の内にしまわれた。

翌朝、カナダ人留学生の日程が切り上げられ、3日後の便で全員帰国することが発表された。その日から振り替え連休が宣言されたこともあって、それを機に真鶴の生徒とグレンライオンの生徒との「記念戦」がラッシュ的に始まったが、伊藤早苗もその中に混じってローランド・ヨークとの一騎打ちを申し込んだ。無論ローランドは快諾した。対抗戦の時にまともな勝負ができなかったからである。

その日のうちに空戦は行われた。例によってモニター前にはかなりの観衆が集まる。空域は男子部側の洋上だった。

伊藤はファルクラム、ローランドはカナディアン・ホーネットで上がる。高度8000で編隊を解くと、両者鋭く機首を逆へ回し、互いと距離を取ろうと……したかに見えた。しかしそこで伊藤は完全に機首を振りきらず、途中からローランドの後ろへ回ろうとした。基本的な「だまし」だが、ローランドはその手には乗らなかった。スッと機首を沈め、急降下に入ったのである。あわてて追い掛けるが、間にあわない。ローランドはすぐに引き起こして垂直ループに入り、あっという間に撃墜判定を伊藤から奪った。

「目ノ付ケドコロハイイ。後ハ経験ガ物ヲ言ウダロウ」

着陸パターンに入りながら、ローランドは伊藤にそう言って、励ました。

「あ、宇垣先輩！」春日はその「空戦ショー」のモニター前に宇垣の姿を認めると、すぐに呼び止めた。「今すぐ勝負しましょう。やっぱりこないだのソーセージじゃ納得できません。武器はこれで！」

彼女が取り出したベレッタ92SBと、春日の自信に満ちあふれた表情とを見比べながら、宇垣は啞然となってあんぐりと口を開いた。

「お前、よっぽどの自信家か、それでなきやバカヤローだな」彼女は懐ハ手をやる。「上等だ、気に入った。表に出ろ！」

ドスの効いた怒声に春日は若干腰が引けたが、もう後には退けなかった。

立会い人には宇垣の腹心、山城英理がなった。

「背中合わせに立って……私が言った通りに3歩歩いてから撃つこと。3歩目が地面に付

くまでは、抜いても駄目だからね」

春日は生唾を飲み込んだ。背後にいる宇垣は、気配すら感じさせない。

「1……2……3！」

抜いたのは若干春日が早かった。撃ったのは宇垣の方が早かった。しかし、お互いに初弾は外した。横へ飛んだからである。動きながら、動く目標を撃つのは、結構難しいのである。互いの2発目が相手のほおをかすめるが、宇垣のガバメントの3発目が、春日のどてっ腹に命中した。無様に春日がノビる。助け起こしながら、宇垣は山城に言った。

「腕落ちたなあ」

「木刀でやった方がよかったんじゃない？」澄ました顔で山城は答えた。

「抜かせ！」

さすがの宇垣も、やはりあの放送のことを知ってというもの、木刀の「ぼ」の字を聞くのも嫌になっていたのだ。

ゴタゴタが終わると、すぐに栗田はるなは模型部常置のKC-10で飛行訓練を始めた。遂にある程度の目標を達するまでになっていたのだ。後はジャンボを飛ばすばかり、航空大の受験まで残すところ半年である。

が、不安要因はいつまでたっても存在した。

「最近坂井さん、またホーネットで飛び回ってるよ」扶桑和子がF-15でエスコートしながら、その話題を持ち出す。「時期的に言ってもそろそろじゃないかな」

「もうよそうよ」長門がうんざりしながら答える。「私やもう、あいつたやり合いたくないよ。何か気の毒でさあ」

「噂すりゃ影ちゃうか」

不吉な霧島宏子の予言が、4人を6時方向へ振り向かせた。

「……げ」長門が一番先に確認した。「あの機影はホーネット……」

大当たりだった。否、大凶というべきか。実際それは坂井機だったのである。影山のキス事件で立ち直った彼女は、開き直って再び4人に勝負をいどんで来たのである。

彼女ははるなのKC-10の真後ろ、鼻先をぶつければかりに位置すると、言った。

「はるな先輩、勝負して下さい！」

「あんた、この図体が目に入んないの」はるなが呆れ声で答える。「正気の沙汰とは……」

「もちろん先輩には、15に乗ってもらいます。それに先輩が受けるまで、私はあきらめませんよ」

やれやれ。はるなは肩でため息をついた。同乗している中1が、どうなることかと無言で見守っている。……そろそろ世代交代の時期なのだろうか？

「……わかったわ」

海上で興味本位に無線をモニターしていた榛名は、（榛名の位置を坂井に教えたのも、大本をたぐると彼女にたどりつく）目をむいた。口調だけで心境の変化を読むくらい、双子の姉妹なのだからそう難しいことではない。長門たちは、また普段の短期が始まった程度にしか見ていなかったが……どうやら今度こそ、本気の本気で怒り心頭に発したらしい。

「こりゃ火に油注いだか？」

榛名は頭をボリボリとかき回した。

「今から乗り換えてくるから、その間に長門たちとやってなさい！3人に勝ったら、相手

してあげるから！」

やった！はるなだけでなく、もっと幅広い力試しができる。坂井は純粹に喜んだ。はるなのKC-10は女子部の滑走路へ引き返していく。

「……だ、そうですが」長門はおどけた。「誰から行きましょう」

「ほな、ウチから行こ」

霧島が編隊を解いて、坂井のホーネットへ向かった。ちなみにこのホーネットはF/A-18CのエンジンをE型用に強化し、機体全面をホワイトに塗装、垂直尾翼には赤で「ライジング・サン」を書き込んでいる。派手な機体だとは霧島も思ったが、エンジンの強化までは気がつかなかった。坂井は低空へ彼女を誘い込むと呆気無く霧島機を血祭にあげた。エンジンパワーに差があまり無くなると、空力的に有利なホーネットの方に分が出てくるのである。長門が続いたが、ご丁寧にも自分から低空へ突っ込んで迎えに行ったため、さして時間を要さなかった。彼女の場合は猪突型で、相手が上がってくるまで待っていられたのである。しかも、やはりパワーアップを見抜けなかった。

「おかしい」

最後に残った扶桑和子は、さすがに気付いた。これはどうやらノーマルのホーネットとは様子が違う。普段なら、こうもあっさり負ける二人ではない。

「下手に下りない方がいい」

彼女は決断し、高度8000mを維持した。

「どうしたんですか、怖いんですか？」

想像以上に簡単に二人まで勝ったため調子づいた坂井は、不遜に挑戦した。彼女はおよそ3000m程度を維持している。

「そっちこそ上がってらっしゃい。敵機はいつも貴方の思い通りの高度にいるとは限らなくてよ」

扶桑は緊張で口元をヒクつかせながら挑発した。ヘタをすれば、こっちが相手の秘密をつかんだことがバレるおそれがある。低空へ誘おうとするということは、エンジンをいじったか。この辺の情報分析は、偵察畑から育った扶桑の十八番である。坂井機のズームの鋭さを見て、彼女は確信した。やはりエンジンだ。

勝負はやはり一瞬で付いた。

相手を照準に捕らえるのは扶桑の方が早かったが、その時起きた気流の乱れで弾が外れ、逆に撃ち落とされてしまったのである。

「そんな莫迦な……！」

あとははるなの到着を待つばかりとなった。坂井は待ち切れず、はるなが来る途中を迎え撃つため、女子部滑走路へ向かった。

はるなは久しぶりの高速機の感覚に、少々戸惑いを覚えつつも、何とか操縦感覚は取り戻していた。しかしそっちの方に集中するあまり、警戒がおろそかになっていたことは否めない。従って坂井の接近に気付くのも一瞬遅れを取った。レーダー警報装置のスイッチがオフになっていたら、多分撃墜判定が出るまで気付かなかった可能性もある。ともかく間一髪で彼女は気付いて、回避行動を取った。操縦桿を思い切り押し倒して、低空へ垂直降下したのである。

「バカ……！」

坂井の後を追っていた扶桑は目を見張った。低空に下りるのは定石だが、今回の場合、それは坂井の思うツボだ……！

「ハル！下りるな！」長門が我慢できずに無線でがなり立てた。「奴はエンジンをいじってる！低空格闘戦は思うツボだぞ！」

「……ありがとう！」

はるなは答えながら、全力で引き起こしにかかった。加重制御装置の容量を超過した縦Gが彼女のあまり大きいとは言えない体（163cm、50kg）にのしかかる。このところあまり激しい空戦機動をやらなかった彼女にとっては、かなりこたえた。

どうにか坂井の第一撃をかわしたかと思はるなだったが、6時にピッタリついてくる坂井のホーネットを確認すると、妙な悪寒に包まれた。上昇を中断して右へ機体をひねり込み、坂井を振り切りにかかる。

坂井ははるなの機動にピタリ自機を付けていた。肩で息をついてはいたが、まだ心の平静さは失っていなかった。だが、それも時間の問題かもしれない。興奮は極限まで達していた。高度計にチラリと目をやると、1万mに達している。この辺まで来るとパワーで優るF-15に有利が移る。しかし、もはや彼女にとってそんなことはどうでもよかった。はるなの後ろをとっている。彼女を追う立場に、今、自分がある。誰一人として……分かっているだけではるなが中1でF-86に乗っていた時以来……占めることのなかった位置に、自分がある……！その感動に酔いしれていた。が。

「こなくそーっ！」

はるなの断末魔の叫びが聞こえたような気がした。F-15は突然速度を落としたかと思うと、失速寸前まで機体を引き起こし、翼を大の字に広げた状態で坂井の目の前に立ちはだかったのである。

「……プガチョフ！……そんな、イーグルで!？」

衝突の危険を感じて坂井は進路を右へひねった。左主翼をかすめるように、「立った」状態のはるなのイーグルが通り抜ける。彼女の機体はそのまま首を戻すと横滑りを始め、横転加速しつつ背面で坂井のホーネットに覆いかぶさり、ある程度速力を稼ぐと後ろへまわり込んだ。……正直、怖かった。失禁さえしたが（影山キス事件と遅れに対する開き直りで筆者はもう自棄になっている）、そのことに坂井自身が気付くまで、もうしばらくの時間を要する。怖いことは怖かったが、今はそんな泣き言を言うてはいられないのである。大慌てで機体を左に滑らせ、射軸から機体をずらす。……と、そこへはるなの声が飛び込んできた。

「今で充分でしょう」

今までに聞いたことのない声だった。まさかとは思うが、どうも涙声らしい。

「今の機動は、普通なら動転してその後の回避までは気が回らない……今、坂井はそれをよけたんだから……上等よ……」

「そんな……」

「おい、坂井、おめえ燃料計は大丈夫か？」粗削りな長門の声が割り込んできた。「ホーネットの燃料じゃ、そろそろ危ないはずだ」

「！」

慌てて目をやると、実際燃料計には警告ランプが灯っていた。

「心配ないわよ。下見れば？」

はるなが言う。真下に見えるのは、女子部の滑走路……！

「最低限のプレゼントってね……三人とやりあっただけで、かなり消耗してるはずだし」

はるなは続けた。坂井は自分の目と耳を疑った。まさか、空戦開始は海上だったはずだ。それを、回避行動をとりながらここまで引っ張ってきたというのか。

やはり、はるな先輩にはかなわない……。坂井は思うと同時に、機内がどうも「臭い」ことによく気付いた。腰から下もやけに冷たい。

「先輩……あの……」

どうも言い出しにくいことでもある。詰まりながら、どう言ったものか坂井は悩んだ。

「早よ降りて着替えや！腹冷やすで！」

霧島が悟って助け船を出す。

「すみません！」

坂井は急いで滑走路へ降りていった。気が急いでいたせいもあって、その後のはるなの通信には気が回らなかった。

坂井の機体がアプローチコースを下る途中で速度を上げたので、管制係の生徒はその先を容易に予想できた。白い機体が滑走路の軸線に沿って8ポイントロールを打ちながら、高速で抜けていく。……無理もない。はるなが後ろを取らせたのは、実に6年ぶりのことなのだから。その位のことは許されてしかるべきだ。

坂井は自分に割り当てられたスポットへ自力滑走していくと、そこに人だかりはなく、ただどうも身なりの崩れた二人がいるだけな事を不審に思った。が、その疑念はすぐに解けた。彼らは、はるなから着替えを持ってくるように手配された宇垣一家の生徒だったのだ。……この借りは、すぐにでもまた空で返そう。彼女は固く心に誓うのだった。

今回のPC及び主要NPC（保留1）

中学 男子部 1年A組 東 大鳳

女子部 2年A組 有明 みどり 井村 真知子 白根 こだま 早坂 理絵

高校 男子部 普通科

1年A組 榊 裕 （立花 陽明）

2年A組 影山 翔

3年F組 加賀 実

理数科

2年H組 沖田 悟 菅原 絵馬 鳩山 平和

3年G組 赤城 広義

女子部 普通科

1年A組 朝比奈 美雪 春日 千明

2年A組 伊藤 早苗 加越 京子 坂井 法子 初雁 つばめ

F組 永野 伊勢

3年D組 霧島 宏子 栗田 はるな 長門 洋子 扶桑 和子

F組 宇垣 麻美 如月 まどか 栗田 榛名

その他のリアクション ()内はキャラがいる場所

- ・有明みどり(男子部)
「まや」艦上から逆ECMに挑戦するが、失敗。連休中は試験勉強。
- ・井村真知子(男子部)
「まや」の第二次改装を計画するが、速度低下を解決できずに挫折。
- ・白根こだま(女子部)
風紀委員の任務に従事。連休中は実家に帰って静養。
- ・早坂理絵(女子部)
その他特記事項なし
- ・東大鳳
トマホークを点火したのは、実は彼。破壊するつもりでわざと狙った。反クーデターのときの傷で、連休中は入院。
- ・榊裕
その他特記事項なし。
- ・立花陽明(男子部)
真鶴の伝奇について調査を続行。
- ・影山翔(男子部)
クーデター時は自室で寝る。
- ・沖田悟(男子部)
連休中は入院。
- ・菅原絵馬(男子部)
その他特記事項なし。
- ・鳩山平和(男子部)
その他特記事項なし。
- ・朝比奈美雪(女子部)
弓道の昇段試験を受ける。が、惜しいところで失敗した。
- ・春日千明(男子部)
その他特記事項なし。

- ・伊藤早苗（男子部）
試験勉強。
- ・加越京子（女子部）
反クーデターのときの傷で、連休中は入院。
- ・坂井法子（女子部）
その他特記事項なし
- ・初雁つばめ（男子部）
反クーデターのときの傷で、連休中は入院。

校長から

ほとんど反則だとは思いましたが、保留生徒の中から立花陽明君を勝手に使わせてもらいました。でないと話の進展が苦しかったし。彼は以前から真鶴の歴史を調べていたので、こっちにしてみれば好都合でもあったのです。カーライオ君、ご免ね。

しかしまあ、今回はエライ目に遭いました。旧軍石井部隊の残党によるバイオ・ハザードのせいで、見事に半月ほど処理が停滞したのです。結局、風邪に水疱瘡を併発して寝込んで真鶴の処理なんかとてもじゃないけど無理だったのですね。おかげで「SONIC DIVER」の処理もたまるし、完全にパニックです。正に「五四豪雪」後の新幹線運転指令室。……で、玉突き状にしてBlowersの発行遅滞につながったのです。とりあえず真鶴に関しては、ページ倍増（当社比）ということで勘弁して下さい。

とりあえずこれで第一部は「完」です。このあと、勅使河原の仕掛けた猟奇な（もしくは○谷的な）事件の数々が起きていく訳ですが、これは第二部です。

今度は6月前半。全員夏服着用が許可されます。あとは15日に体育競技会があります。これは全員参加。何やるか書いて下さい。種目については特に明示しません。「書いた者勝ち」とします。こっちの設定では「ライフル射撃」なんてものもありますが、要はそういう模型部がらみのもでもいいし、100メートル走みたいなオーソドックスなのもいいです。ただ50メートル走なんてのはちょっと……。小学生じゃないんだからね。他にはイベントはありません。それでは！

それからクレギオンの「Net World」を見てから参加された方へ。あっちでは便宜上ああいう書き方をしましたが、実際この「真鶴世界」は蓬莱とは何ら関わりがありません。原作の「榛名とはるな」は蓬莱ネットが始まる前から書き始めていましたし、PBMが出たのも蓬莱RPGが出るより前です（少々微妙なタイミングですが）。従って、しつこいようですが蓬莱ワールドを前提としたような「無から有を生む」ごとき無茶な行動は厳に慎んで下さい。お願いします。

生徒身上調査書

中・高 普通科 2年 A組

生徒氏名	影山 翔	性別	男・女	国籍	日本	生月日	2月 7日
氏名	翔	年齢	16 歳	本籍地	静岡		
保護者氏名	藤田 昌弘	性別	男・女	年齢	21 歳		
保護者住所	〒211 三ヶ浜 7-1 (方)						

能力値			
体力	精神力		
腕力	14	知理解	10
脚力	10	記憶	7
走力	8	戦術	12
泳力	3	力戦略	13
瞬発力	10	洞察力	11
持久力	9	機転	11
機動性	12	決断力	10
耐久力	12	気力	9
柔軟さ	10	繊細さ	10
魅力	6	好奇心	7

写真



技能他	空手 初段 合気道
	危険物取扱 2種 情報処理 2種
	電気工事士 1種

身長	180 cm	体重	68 kg
視力右	1.5 (.)	左	1.5 (.)
運	3	異性への関心	2

好きなもの	飛行機、バイク
	B2、ケシカ

級内役職	
------	--

嫌いなもの	へん存叔
	ニッコロした叔、太鼓こ

部活動・生徒会	ボクシング
---------	-------

手下募集集中! キミもいっしょに悪人をやろう
 たのしいよ。今だと好きなマシーンに
 乗れよ。(ホントか)

編注:次は伊藤早苗さんお願いしよ。

Damyan = Kizaki's Road of The Messiah

Road No.9 “~End of the Load~ Unfinished Generation”

Written by Damyan=Kizaki

Prologue

そこの空気は、血の流れていない鉄の扉のおかげで、外のスクラップと青い液体に汚染された毒気に侵入されるコトなく、ここだけのものとも思える静寂をたたえて、音もなく漂っていた。

清浄されすぎて、鼻の奥が痛くなるほど冷たくなった濃紺の大気の中に、奴はいた。

否、“奴ら”と呼んだ方がいいだろう。

その胸に野望を秘めていた大英帝国の男は、計画も、手下も、金も、全てをだまし取られ、ただ最後の望みを従えて、ロココ調の家具類で狭くなってしまった部屋に立っていた。

間抜けな宇宙服に護られた貴族に、野蛮なショットガンを突付ける男には、バイザーで見えない彼の表情が手に取るように分かった。

失意と安堵。

——仕方ない、今は仕方ない。今は彼らに任せよう。彼らならば、自分をここまで追いつめた彼らならば。

そして、いつの日か……——

「丁度いい時に来た。まだ時間がない訳ではない」

風が変わるのを、彼らは感じとった。

「何？今さら何を……」

「お前達、地球を救いたくないか？」

「何だと……」

“失脚”した貴族の群れが、脇腹のテーピングを力なく押さえる男に肩を貸していた女の手で、彼から受け取ったファイルを手渡した。

その連れは、見覚えがあった。

「“ゲヘナ計画”」。奴らが秘密裏に仕掛けた原爆級の爆弾を、今から約一日後、同時に爆発させる……しかも、仕掛けられているのは活火山の内部近く……どういうコトか、分かる？」

「……核の冬、か……なんてこった……」

しかし、彼の言葉に絶望は存在していなかった。むしろ、念が。

「ゲヘナ計画行使までは、後46時間17分1秒66だ」

ウエストコーストは、凍りついた空気に漂う紙を握み取り、広げて見せた。

「ミスター・土竜……だったな、まだ間に合うかも知れん」

1889年製の
大英帝国公式世界地図の上には、何箇所か赤
(血のような赤)

で印がつけられていた。

I

目の前を、赤いシャボン玉が通っていく。

「おい富山」

「はい、鬼崎リーダー」

「今の聞いたな？」

「いまましい雑音を除けばね」

「他の連中も聞いてたか？」

「はいもちろんパッチシッスよベリゲー」

「いっぺんに言うんじゃねえよバカ」

俺達の宇宙服のヘルメットに付けてあるボロ通信機は、作戦中リアルタイムに交信ができるよう、常に回線を開いている。そこに、ウエストコースト掌捕の西風隊連中の会話が飛び込んできた……のはいいが、こんな鉄の化モン目の前にンな言われたら、ため息の一つもつきたくなるモンだ。このデクの棒といいゲヘナ

(ゲヘナだと？ナメてんのかてめえら)

計画といい、ホンットにロクなコトにしちゃくれねえぜ、異星人のクソ共はよ……

「見つけたら百回殺す」

「ダメー、ンなコト抜かしてる場合じゃねえでしよが」

サイボーグ・アルブレヒトは、その電線の詰まった脳に直接説教された言葉通り、ぶっそうなマシンガンをこっちに向けたまま、不法侵入者

(法だと？てめえらが“法”かよ)

である俺達を消去すべくゆっくり近づいて来た。そのコバルトブルーの眼

(俺と同じ)

の光には、たえず殺意と狂気をたたえている。

これじゃあまるで昔の俺じゃねえか。

「おいアルブレヒト」

「リーダー、聞いちゃいませんよ」

全身が総毛立つのを感じる。

「偉大なる法皇より与えられし権限により」

久しぶりだ。

この所ごぶさたしていた感情だ。

「あ、兄貴……何：をあいててててててて」

「藤丸さん！あなたは重傷なんですから、あまり動かないで、俺達に任せて下さい」

「へっ……ざ、ざまね、えぐあつ」

「貴方もです、天姫さん」

「ナ、ナーシム、さんがいれ、ば、な……」

俺の五感は全て、奴に向けられていた。

「てめえを“悪魔”と見なし」

キリスト野郎が来ても死んでろ。

「てめえを“退治”する」

俺は“悪魔退治人”だ。

それ以外の何者でもない。

はずだ。

「鬼崎リーダー！」

「富山、退却準備だ。機関部はあきらめよう」

「なんで！なんでだよダメー！」

「機関がブツ壊れてちゃ扉開きゃしねえだろが！ンなコトも分かんねーのかよ」

「……チッ、クソが……」

俺はこいつを消さねばならない。

「てめえの骨はてめえで拾って“帰って来い”つつつたの、覚えてんな？」

「はい」

「約束破ったら針10億本飲ますぞ」

人間は、“生きて”初めて存在する意味を持つコトができる。それなのに、こんなババアも来ねえようなトコでくたばってみろ、子々孫々バカにされるぜ……それ以前に、自分が存在していた証拠を未来に伝えてくれる子孫自体、存在し得なくなってしまう。

てめえらは俺とは違うんだよ！

「……負傷者は集合地点に、以外の者は西風隊のサポートに向かいます」

一瞬の沈黙。

改造人間の影で暗くなった目の前を、中身の電線がブチまけられたオートマトンの首が、気味の悪い微笑を浮かべながら、ゆっくり泳いでいく。その血の色は、やはりコバルトブルー

(俺の眼と同じ)

だった。

「俺はこの野郎を始末する」

「！」

「でっけえお世話だ。言い出しっぺが約束守なくてどーすんだ？」

俺の望みは、たとえ瞳の色が青かろうと、これからの人生どうなっていくか分かっているよ、と、現国赤点のこのバカの頭の中に“俺”が二人存在しようと、

おめえらと“同じ”になるコトだった。

今もそれは変わらない。

そうなるためには――

「作戦が終わって、ポセイドンで宴会やってる時、俺は必ずそこでブラッディマリーをちびちびやってるかな」

「……貴方を信じます、必ず……！」

「とったと行けよ、死にてえのか？」

「……みんな、行くぞ」

まずは“生きる”コトだ。

うんめいなんぞ、てめえで決めるモンだよ……

何も聞こえなかった。

闇の中で“悪魔”が泣き叫ぶ声さえも。

ただ、目の前に滅殺すべき者が立っている。

奴が囁うのが見えた。

「フウウウウウウウウウウ――」

ダークブレイカーを構え、気を練る。

相変わらず、彼の眼は蒼く輝っていた。

まだ、腕と足に脳からの命令は来ていない。

静かに目を閉じる。

それでも、奴の姿ははっきりと分かった。

「きざきだみあん、ころす、ころす、ころす、ころす、ころす」

恐怖は元からない。

憤りも、哀しみも、憂いも、怒りさえも、今の俺には存在し得なかった。

“意志”のみがあった。

俺が“退治”すると決めたから、“退治”するだけだ。幸い、邪魔する者はない。

息を止めた。

目の前を、黒と赤、そして青のストライプが漂っていく。

そして奴がいる。

目を開けた。

俺の存在は、感じるコトができなかった。

俺は“闇”なんだから……元からの体を変えるなんざ、ととてもできるモンじゃない。

「鬼崎流闘魔剣術……！」

それならよ、

「ころす」

中身を変えりゃいいさ。

「奥義の6……応用の2……」

やっとな、解決方法が分かった。

問題はあるが、ねえよかマシだ。

「ころす」

「闇殺撃!!」

“一つ”になりゃよかったんだ。

なんでこんな簡単なコト思いつかなかったんだろう……

「！」

「ダメー！」

何か吹き飛ぶ音がした。

II

「……終わりだ……」

銀の船から転送されてきた“ゲヘナ計画”一連の書類を前に、ポセイドンのガンルームに集合していた居残り司令組は、ただ言葉もなかった。

「極ジャンプに……地震……極冠の氷が溶けだして……そこに火山灰での気候変化……フェイク、これで地球の人口は」

「ざっと見積もって、十分の一に減る」

「グレートバリアリーフの海底火山だ……が、この船をもってしても、ここから九時間はかかる……」

周囲に、死の匂いが漂っていた。

「とにかく行って、一つでも火山を減らすんだ！でないと、今まで俺たちがやってきたコトの意味が……」

別室でダイブ中のジェドの放送に、マディはガッチリした体をビクつかせた。

「おいマディ！あんたがしっかりしねえとしょうがねえだろが！銀の船で戦ってる連中に笑われてもいいのか、え、マディ=ラング!!」

エリスタンの言葉は、半分悲鳴と化していた。それほど、彼らの指導者はコソ泥のように小さく見えたのだ。———彼は疲れていた。

「……すまん、エリス。よし、少しでも多くの人を助けねば。大田原君、二時の方向に前進全速」

「了解！」

異星人技術による超電導航法を使う彼らの船は、振れを知らなかった。

「……誰が火山に？」

新尾崎は口にはならないコトを言ってしまった。誰が行けると言うのだ……

「私が行こう」

フェイクの無機質な声が、広いガンルームに響いた。

「だめ、貴方死んじやうじゃない！」

「ナーシム、私以外に誰が海底に何時間も潜ってられる？ロクな潜水服もなしに？私なら五百度にも耐えられるし」

「それでも数分じゃないの!？」

本物を無視し、“それ”は続けた。

「私の仕事は早い。多分フィリピンも廻れる。一人の命より何十万の命を考えた方がいい。それしか道はない」

フェイクの声は、哀しくなる程冷たかった。

「なぜ……なぜ貴方が……」

ナーシムの薄汚れた顔を、別離の涙が伝う。

「私がそう決めたのだから仕方ない。自分の行く先は自分で決めるというコトを、よく覚えておきなさい。いいかい？」

ナーシムは、今の自分の顔に自信がなくて、愛する人に見られなくてよかったと思った。

彼、沖田雄吾は、はるか天上の闇の中でもがいていた。

そして、彼女に声をかけてやる者も、誰一人としていなかった。

疲れが、各人の心の中に“絶望”と“無気”を引きずりこんできていた。“やるコトは全てやった”と思い始めていた———まだやるコトは途方もなくあるのに。もしこれが奴らの作戦なら、彼らは思い切りハマっているコトになる。

「私は……君達に会えて……」

「……」

数度にわたる危険な戦闘と、この時を迎えるための極度の緊張感は、すでに彼らの言葉を奪ったあとだった。

涙さえも、枯れ果てようとしていた。

「……え？」

突然アルダが声を発した。この重苦しい空気の中では、場違いな声だった。

「……フン、……ホウ……へえ、こりゃあ傑作だ……クククッ」

今度は新尾崎が、さっきまでの失望感をたたえた表情をかなぐり捨て、半分笑った顔で奇声をあげた。もちろん、クルーの目は二人に行く。

二人が彼らと違うのは、声や表情だけではない。二人とも、片耳に通信機のイヤホンを当てていた……世界中のレジスタンス向けに開いていた大規模な回線につながっているものだ。

「プッ……へへへっ、アハハハハハア———ッハハハハハハヒッヒヒヒヒアハハハハ……」

ついにこらえ切れずに笑い出した。

「し、新尾崎さんどうしたの!? アルダも……」

「へへっべっ別に狂った訳じゃアハハありませんよヒヒヒヒヒ……」

新尾崎はたまらず、腹を抱えて苦しがつて見せた。まるでマンガだった。

「ウフフ……あのね、あつははは……あーおなかか痛い……今全艦放送入れるわね」

アルダは涙を流しながら、イヤホンのジャックを引き抜き、横のスイッチ類を叩いた。

“ザザ……こちらシャクシャイン＝アイヌ＝被抑圧者連合……ザッ倭人名ウス山の爆弾、ただいま解除中……ザザッ同時に津軽海峡及び青森港を総攻撃中……戦況は八対二で我々の優勢……”

「ええっ!!」

悲しみにくれていたナーシムが、思わずびしょ濡れの顔をあげた。

“ザ……北アイルランド＝ウェールズ連盟だ……爆弾解除作業は極めて順調……ガッ連絡の今までなかったコトを遺憾に思う……ザ———ッ祭りは大勢の方が楽しいぜ……”

「おおお……」

エリスタンは、その場に立ちつくしている。

“ガガッそっちは大丈夫か？ バルセロナレジスタンス『風』活動再開……ザッスペインは……ガッ俺たちに任せておけ”

「へっ、やっど答えてくれたか……遅いんだよ全く……」

大田原の舵を握る手に、さらに力がこもった。

“アメリカテキサスレンジャーⅡだ！……ザッ今度が本番だ、なあ相棒……”

「わ、私は……私は……今まで……」

あふれる涙を隠そうともせず、マディは天をあおぎ見、膝まづいた。すでにナーシムの涙の質は180度変わり、アルダも笑いもとの違う涙を流していた。これで、横に愛する人がいればいいのに、とも思い始めた。

突然マディが立ち上がり、伝声管に向かって静かに言った。

「南船君、ジェド君、聞いたかね？」

“もちろん！ やったな、マディ！”

“大至急、銀の船のダイバーに伝達します。あと、他のレジスタンスの連絡用に、世界規模で広報マトリックスを開きたいのですが、許可をお願いします”

まだ涙は止まらず、彼の口髭と顎髭はずぶ濡れになっていた。

蒸脳空間では、涙はどのように表示されるのだろう、どんな音がするのだろう。エリスタンの瞳は輝きを増し始めた。

「許可しよう、早速かかってくれ。もちろん作戦終了後だがな」
彼らは、“世界の声”という、エンドルフィンにも勝る麻薬を手に入れた。しばらくは、苦痛も忘れるコトができよう。

III

多少でも、空気があったのには助けられた。俺の宇宙服は、気の爆発の衝撃でボロボロになってしまい、ヘルメットはとっくに吹き飛んでいた。通信機は一応拾っておいたが、また使えるかどうかは疑問だ。一応回線は開けてあるが、こっちは使わないことにした。壊れていないのなら、あっちから声をかけてくるはずだ。

通路には、もう動くオートマトンの姿はなかった。バラバラになって通路の隅に浮かぶ奴らの体は、俺の目にはひと昔前閨内にうじゃうじゃいた物乞いのように見えた。青いシャボン玉が、気に食わなかった。

そして、反動が大きいために“禁じ技”にしてある“奥義の六”を使ってしまい、ほとんど力が抜け切ってしまった俺の体を支えてくれる“仲間”は、とっくにいなくなっていた。俺は重ねて、後悔していた。

「……ふうーい、やっと鎮まってくれたか、全くうるせえ連中だぜ……ん？こいつあアルブレヒトか？HEAT弾の肉薄攻撃でも食らったな……ったくおめでたえ野郎だぜ、あいづらも、おめえもな……ま、ドタマ残ってっから、運が良けりゃ記憶ぐれえは再生できんだろ……やれやれ、重てえったらありやしねえぜ……」

暗い場所に一人、“裏切り者”財野一郎は、スクラップを抱えて床を蹴った。

しかし、彼は気付かなかった。

“それ”は、さっきまで彼のいた所に立ち、ツメのような手をうごめかせ、一人、ため息をついた。

確かに、“奴ら”は存在した。

アルダが行く前に見せてくれた船の見取図

(縮尺が書いてなかったのは失敗だったな)

には、司令部と機関部、そしてウエストコーストの部屋の配置がハッキリ記してあった。俺たちは、それを何とか覚えてここに来ているのだ。手に取るように、とまではいかないが、奴の居場所への行き方は分かった。そこ、8ブロックの光景は、言うならば“スクラップ置き場”だった。さすがに地球人のVIP、護衛の数は並じゃない。それだけ、ウチの連中の被害も大きかったことだろう。現にアルフレッドがアバラを折り、西風の片腕が碎かれたとの通信が、以前に入ってきていた。ま、さっきも言った通り、これ以上ウエストを守ろうとするバカはもう一人もいなかったが。しかし、こいつらの仕事は、ただ単に奴の守備だけだったのか？もし、勝手な行動の目立つウエストコーストの監禁の任も兼ねていたら……別にクソツタレな連中とは思わねえが、何か、気に食わなかった。

侵入された責任を奴に押しつけて、消そうとしたら？

別にウエストを憐れんでる訳じゃない。ただ、“気に食わねえ”ことが、たった一つだけあったからだ。

「……チッ、重傷人にンなことさせやがって……」

聞く人もいないのに、俺はポツリ、ボヤいた。

彼らは追いつめられていた。

早く逃げなければ。“ゲヘナ”情報漏洩の責任を追及される前に、彼女を殺される前に

彼はここで終わるべきではなかった。彼の炎は、今だ激しく燃え上がっていた。

野望？確かにそれもある。昔なら、それだけだったはずだ。

今では――

一つしかない鉄扉には、オレンジ色の宇宙服が一人、ステンを持ってついている。部屋の後部にある脱出ポッドを使うには、彼が邪魔だ。どうせ外には出れない……それ以前に、彼を倒すための道具が、彼の周りには全くなかった。もちろん、デリンジャーは没収されていた。

……奴らは、“彼ら”を甘く見すぎている……本当なら、あんな貧弱な装備で来た連中など、一ひねりのはずなのに……何を考えているのか？それに……早く逃げないと！畜生、あの男は知らない……“彼ら”の本性を……

グワシャッ

突然、鉄扉が灰色の壁からはがされて宙に浮いた。宇宙服は、完全にフイをつかれらしく、まだ浮いてしまった体をバタバタさせていた。チャンスだ。

「瑞生！」

ピシッ

扉があった所からの野蛮な鉛弾が、彼らの足元にめり込んだ。

「！」

遅いながらも女をかばおうとすると、すでに彼女は右手を彼の心臓の上にかざしていた。

「貴方にこんなトコで死なれちゃ困るわ」

「困ってんのはこっちだよめえら」

声の主がボロボロなのは分かったが、逆光で顔は見えなかった。“彼ら”は、この部屋に電気は通してくれなかったのだ。

だが、声には聞き覚えがあった……見覚え、と言った方がいいだろうか。彼にとっては。「んなトコで何乳くり合ってたんだバカ野郎。ラッダイトが来る前に、とっととあっち行けてんだ、てめえ死にてえのか？」

死ぬつもりなど、毛頭なかった。それよりも……

「とっとと行けよ、聞こえねえのか？」

“彼”の銃口は、奥のポッドの扉を指している。

「……礼を言うべきなのかな？」

“彼”は何も言わなかった。

オレンジの宇宙服が、彼を見て手を出そうとしないのを見ると、“彼”の考えを詮索する気はなくなった。

「……行くぞ」

ウエストコーストは、女を連れて部屋の奥に進み始めた。

「おい女……橋瑞生だろ」

彼女は足を止めた。

“彼”は、分かっていたようだ。

「この玉の輿野郎が、せいぜいたくさん貢いでもらえよ……」

「……あんたに言われたかないわ」

「ヴァチカンの坊主には俺から言っとく。手紙は要らん、Xeusにも顔出さねえでもいいかな」

「大きなお世話よ」

“彼”は、何か輝る細長いものを投げてよこした。

「餞別だ、くれてやる。死にたくなったらそれで手首切れ……じゃなかったらな、」

銀の短剣だった。

「奴と生きろ、這いつくばってでも生きろ」

「……ありがと」

気付くと、もう“彼”の姿はなかった。

“彼”の表情を確かめることはできなかった。

彼の目の前に、むき身のままの通信機が流れていた。それは、必死になって地上からの声を叫んでいた。

“ザザザッ除順調、繰り返ガッ爆弾除去作業ザザーッ調、危機の回避はガッ間の問だザザ

ッ聞いてるかみんザザッ俺たちはガッた”

ウエストコーストは、表情一つ変えずポッドに乗り込み、扉を閉めた。
“俺たちは勝った”

俺は、別のポッドの扉の前に立っていた。

通信機はくれてやってしまい、もう奴等と連絡はとれない。それに、
“決着”をつけるなら、今しかない。

本当の“闇”が周囲をおおっている。ここでなら、そして“今”なら。

俺のことは、あそこにつつ立ってた西村にことづけしてあるから、多分大丈夫だ。

やるしかねえ。

俺はポッドの扉を開けた。

IV

微かな振動と共に、ポッドは打ち出された。強化ガラスの窓からは、もう一機の円筒が
蒼い星に引かれていくのが見えた。無事、逃げおおせたようだ。

さあて…時間はずかだ。

俺は、ストラップの一つで足をくくり、キルト張りのソファに腰を沈めた。

星の輝きが、やけに弱々しく見えた。

…

…出てこいよ、相棒。

…何だてめえ、今頃になって。

死んでもらおうか。

クレージー。何抜かしてんだオラ？

ケリをつけんだよ、分んねえか？

…一人だけでできると思うのか？

やってやれねえこたアねえさ。

…おめでたえ野郎だ。俺に勝てるだけでも？偶然からでも、俺が生み出したてめえが…
…“できそこない”のてめえが、“基本”の俺に勝てる、だと…気でも狂ったか、“勇
一郎”。

へっ、気ならもうとっくに狂ってるさ。てめえの雑念が“俺”を造り出してからな。す
っかり忘れてたぜ…てめえのことをな。解決方法も。俺はてめえに似て、よっぽどバカ
みてえだな…

黙んな、“できそこない”野郎。てめえなんざとつと失せろ！この体の元々の所持者
はこの俺だ。ポリープなんぞにブン盗られてたまるかってんだ。

黙るのはそっちだぜ、“蛇弥闇”。もうてめえの出でこれる状況じゃねえんだよ、ああ、
俺の体は“闇”だからな。

てめえのじゃねえ、俺のだ！

中身も“闇”じゃやってけねえんだよ時代遅れ野郎！てめえがいると“光”が入って来
れねえんだよ！

“できそこない”が。甘えんだよてめえは。俺には分かる…もうすぐ“俺”が必要に
なる時が来る。いやでも、俺が出て来なきゃなんねえ。でなきゃ守るのも守れねえ…十
年やそこらじゃねえ、もう

間近に迫ってんだ！俺だってバカじゃねえ、てめえのせにやなんねえことぐれえ分かってるつもりだ。

…そうか、やっぱり“俺達”の体は“闇”なんだな。でもよ、てめえだけが昔みたく体に居座る言われはねえぜ。せめて普通にいるときは、連中と一緒にいてえんだよ俺はよ！ガキが…

ああ、何とでも言えればいいさ、だがな、てめえはよくても俺はよくねえ！俺もこの体を最後まで守りてえ、たせからんな食い違いは、どっちかに流してなくすのが最良の道じゃねえのか？

できるとおもうのか？

ああできるさ。今の俺には“光”がある。弱っちくても、“闇”のキャンパスに穴をあけることができる“光”がな。即ち“力”だ。

…“仲間”か、昔にや縁のなかったモンだがな。確かに奴らは、俺達をマジに見てくれた数少ない“人間”だ。だがな、足んねえモンなら、あるさ。

黄金色の光が、真っ暗闇の部屋を切り裂き始めた。

…何だと…!?

てめえにやねえモンが、俺にはあるこいつをやつてのけるのに十分な“力”だ。

…波出子か。生きていたとはな…何て女だ。“蛇弥闇”、おめえは“俺”を作り出してしまったのと同じに、また失敗したな。そろそろ“親離れ”してもいい頃だ。

…この次にはどっちになつてるか、俺には分からん。それでもいいのか？

いいさ。俺の決めたことだから。

…なあ、“勇一郎”。“運命”って言葉、根本から間違つてると思わねえか？

てめえがしでかしたことの結果が、“運命”て呼ばれるもの…ああ、分かるさ。現国赤点の俺にもな。

“兄貴”

呼んでるぜ。早くやれ。

言われんでも分かつてるさ…

…

…なあ、“蛇弥闇”。

ああ？

ニーチェの言った通りになると思うか？

なる訳ねえだろ。“超人”になんてな…

そうだよな…俺は“人”だからな…

星々の涙がきらめく黒い空間に浮かぶ赤銅色の円筒は、見る者を魅了する蒼い星の似合わない野太い腕につかまれて、流星のように引き込まれていった。

月は相変わらず、柔らかい黄金色の光を、母なる星に投げかけていた。

Epilogue

指は自然に、一年慣れ親しんだフェンダーの弦に触れていた。

ヘアはもうバッチシ決まってたし、新調した服の出来も上々。アンプの調整も完璧だし、蒼いフェンダーは今日は上機嫌だった。何よりも、体の調子がこの上なくよかった。あとはメンバーの出来だったが…ドアを通じて聞こえてくるリハの音を聞くと、問題は何もなくなった。

新装開店ディスコXeusのこけら落としは、この上なく上手くいきそうだった。

異世界Xeusを永久に離れたことには、後悔はしていない。どうせ作戦の後始末はほと

んどやってきたし……まあ、国連相手にBOX代表としてマディと喋べったのはけっこうキツかったが。まあ、BOXも世界に口出しできる程でなくなっちゃうたあ、俺も予想さえしていなかった。まったくヤル気のねえ野郎ばっかだ。変にでかくなっても仕方ないので、そこを離れる一日前に解散したが、まああいつらのことだ。BOXの名を借りずとも、ためえでやってくことだろう。

それにしても、ナーシムと沖田、それにアルダと刈屋が本当にくつついたかどうか、確かめられなかったのは残念だ。なんせ、アルダと刈屋は年末に、結婚もしていないのに旅に出てしまい、ナーシムと沖田の結婚式は丁度今頃らしい。せっかく法王庁付神父の権限で結婚許可証を書いてやったのに、しんいんじゃ意味がない……沖田の奴、あの娘をフラなきやいいんだが……ま、それならそれで、ナーシムを取り合ってた連中にボコボコにされるだろうし、俺が口出す場所じゃない。まあ、これだけは言える。そこには、どんな形にしろ、“愛”と一般に呼べるものが存在していた。このものと全く同じものが。

「いようダミー！十ヶ月もどこ行ってたんだ？見ろ、おめえのいねえ間に彼女できちまつたぜ、いーだろー!？」

「……はじめまして、北条です……よろしく」

「強者オ、泣かすんじゃねーぞオラ!？」

藤丸はどうしたろう。俺が行く時はまだ腕にそえ木をしていたが……ま、あいつのことだ、相原の奴と夫婦ゲンカでもおっ始めてるだろう……俺のことを忘れないでいてくれるだろうか……もし、“愛”と同じに“友情”もまた、ここと同じものが存在するとしたら

「鬼崎先輩一ツ！なんでもっと早く連絡を……」

「俺、中学生になったんだぜ！いーだろ兄貴」

「ハっ、イキがってんじゃねーぞジュージ。輝士もな、店のにバレっとまじーから、VIPルーム行ってな、あとで行くかっよ」

なぜもっと早く気付かなかったんだらう。結局“人”の間にあるものは、時間より遠かろうと宇宙より遠かろうと、どこにでも平等に存在するんだ……チェッ、くせえな。

「……あの、鬼崎さん？ああ、すごい髪型してるから気付かなかったわ……あの、石黒館長も連れて来ちゃったんだけど……お嫌かしら？」

「……ん、ああ、別にいいって」

「わーっ！すごい頭！ねえコレってスプレー？分かったジェルでしょーあたしカンがいいんだからあ。ねえねえこのギター弾いてみてえあたし生のライブって見たことないんだーねえいいでしょねえねえねえ!？」

「先輩！本番前なんですから……迷惑ですよ」

「あらいーじゃない、アーティストの生の顔って、見る機会少ないんだからあ！ねえこのアンプいくらしたのー？」

「……VIPルーム使わしたげるから……」

「ごめんなさい、嶺子さんが失礼を……」

「いやいいって、初めてじゃねえから……」

「今夜、がんばって下さいね！」

その言葉が聞きたかった。

いつも見ていてくれる人が欲しかった。

結局、両方共存在した訳だ。

クサイこた言いたかなかったが、その時俺は心から聡子さんにこう言えた。

「Thanks！」

“人”なんて、どこへ行こうが同じだ。

その“人”に、俺はなりたかった。

そして———第一歩をふみ出すことができた。まだ一歩だが……

「DAMMY！時間だ、みんな待ってるぜ！早く来いよ！」

「ああMASANORI、キラーの調子はどうだ？」

「もうバッチグーだぜ！早く来いよな！」
友情も、信頼も、笑いも、全て両方に均等に存在した。そして、——
扉をくぐり、ステージに出た。
光があった。
闇があった。
熱気があった。
歓声があった。
仲間達の信頼があった。
そして、
「……この日を待ってたんだ……兄貴！一発どでかいのカマしてやろうぜーっ!!」
“愛”もあった。
「兄貴ィ——ッ」
よう、“蛇弥闇”に“勇一郎”、見てっか？
「愛してるよ!!」
まだEnd of the Road to The Messiahじゃなさそうだ。
「てめえら気合入ってっかーッ!!」
「オオオオオオ!!」
「うっせーんだよ。OK、The Devil-Bustersの初陣、バッチシ決めんぞ！」
まあ、見てろや。
「YEARアアアア——ッ!!」
俺は俺、“人”なんだから、やりたいようにやるさ。
おめえらもな、Steamers。
せいぜい、死ぬまで生きてみるこった……

BGM：組曲VAMPIRE HUNTER D (by TM NETWORK)～ALIVE
(by X)～End of the Road (by Boys II Men)～REVELATION (by
LOUDNESS) The End.

最後のあとがき

原稿は長いしメ切は破る……別にお礼参りのつもりじゃないんだけど、最後の最後でまた迷惑をかけてしまいました。この場を借りて、編集部の皆さんにお詫び申し上げます。

編集の方々はダミーをクトゥルフに出てくるような異常人だと見ているようですが、違います。（基本的にクトゥルフは好きじゃありません）超自然的な表現だったためでしょうが、彼は、一般的に言えば“二重人格者”、元々のペルソナは“蛇弥闇”なのです。統合に成功したかどうかについては、触れないでおきます。つまり彼は化物なんぞではなく、“正常化願望”を持つ精神異常者だった訳……途中から加えた設定もありますが、最初から彼は化物ではないことは決めてあります。それと、妹の波出子（はです）のことですが……詳しく触れるのは愚の骨長でしょう。まあこれだけは言っときます。彼女はやっぱり存在しました。（この辺は多少設定を変えています）

ダミーはXeusのMesseahたり得たのでしょうか？彼曰く、“俺はやりたいようにやっただけだ”まあ玉輿ですね（笑）。少なくとも、最初の時と今とでは、彼の目の向きは変わってしまったということでしょうか。

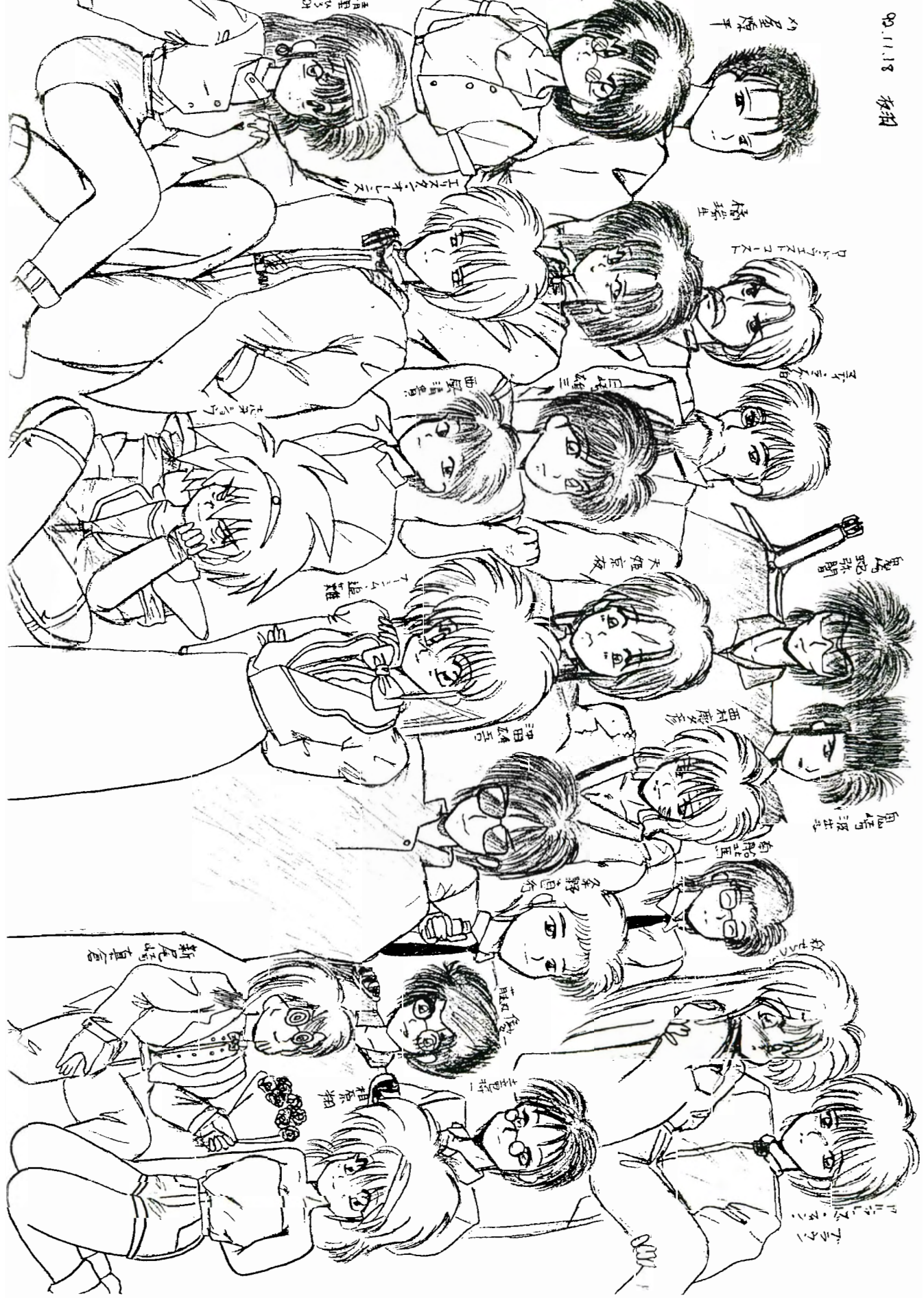
それと今回B5のイラストが載っているとありますが、これは秋せらつ（♂）のプレイヤーの方をお願いして描いてもらった、登場PC・NPC紹介イラストです。ここで、全員のフルネームを公開していますが、描かれていない者の名を挙げておきます。

富山：富山 行

ジェド：ジェド＝ドーダー

アルブレヒト：アルブレヒト＝スコルツェニイ

智明：智明 秀真



の星海平

橋瑞生

アキラコトキ

アキラコトキ

西原清高

天姫京夜

鬼崎弥明

西村慶太郎

沼田公也

鬼崎源生

有能正臣

冬野直樹

秋山

藤原俊一

祖奈栞

土田

アキラコトキ

新左衛門直也

本当はPC全員の紹介をしたい所ですが、もう多く書きすぎました。やめときます。文の質はともかく、今までで一番気合入れて書いたつもりです。その気合が空回りしてしまった部分もありますが（苦笑）。

ともかく、これでジ・エンドです。一年以上、このバカ野郎を見守って下さって、ありがとうございました。どっかでまた……

最後に。

全くFuckな一年半だったぜ！

平成四年十一月二十日

鹿島久義 (Dr)

おわりに

……どうだったい、全く嘘みてな話だったろ？でもマジなんだよな、まったくおもしれえモンだな、世の中ってのはよ……

俺？今の俺は、ぜんぜん大丈夫さ。安心しな。別に取って食いやしねーよ、バーカ。

さて……もう“獣の夜”は終わりだ。早く帰んな、もうここはおめえさんのいれるトコじゃなくなる。彼女も心配するぜ……いない？そりゃ悪かったな。

ん、丁度ワインも終わった。太陽が西から昇ってくるぜ……速いトコ帰らないと、悪魔がおめえを喰いに来るぜ……ま、そんな時は俺呼びな。一分で駆けつけてやるぜ。

じゃあな、来てくれてありがとよ……また“獣の夜”が来たら、シャンパン開けて待つてるぜ……

1996年6月7日

横浜の某屋敷にて

Damyān=Kizaki's Road of The Messiah 了

会長のまとめ

以上で、空技廠は遊演体関係の活動から全面撤退いたします。第一に資金繰りが厳しくなってきたし……以下略。全ての答えは「Blowers」そのものが語っています。

第一話から読んでいた根気強い方は、この連載が他と違ってかなりきわどい（モノによっては完全に放送コードにひっかかる）表現を多用していたことがお気づきでしょう。本来ならこっちでワープロに起こすときに修正すべきことなのですが、筆者の鬼崎君の意図と思い、敢えて最低限の誤字脱字の修正に留めて掲載していたものです。表記に明らかな問題があれば、それは知っていて黙殺したか、あるいは見抜けなかった私の無学ゆえのものです。全ての責任は私にあります。今回のアイヌに関する表記は特に怪しいような気もするのですが（ことこういう方面については、遊演体の表記はアテにならない）、ヘタな修正は若い芽を潰すことにもなりかねませんので、これも黙殺しました。

結局、私の無力さが祟って、最終話が出るころには遊演体で次のシリーズが始まっているという有様。鹿島君、スマン。そして。

お疲れ様。

追記。

遊演体NET93が始動しました。今度は忍者ものだとか。家にも案内が来て、ワールドガイドの中の「第二警察」に惚れ込んだのですが、純粹に経済的理由から、参加を見送りました。その事とは関係ありませんが、かつてサークルの先輩が遊演体のPBM（蓬萊）を評して言った言葉を、ついでと言っては何ですがここに記しておきます。鹿島君がこれを私の「最後っ屁」と見ても、「おせっかい」と見ても、それはどちらでも構いません。

「あそのゲームは50人くらいのグループで、全く同じことをアクションに書いて数で押せば、存分に楽しめる。独力でRAをかけるつもりなら、その金をドブに捨てた方が得だ。FAを独力でかける奴は、豆腐に頭から飛び込んだ方が、ひとのためだ」

三 等 雑 居 室

名前。

☞(前略)宛名と差し出し人が同じというのはやっぱ妙ですね。色々と同姓同名を探しに手を出しています。今のところこういう方がいらっしやいます。

宇田研一郎(同級生)

～健一郎(4～5歳のときの友達。誕生日が12月24日で私と同じ)

電話帳では見つかりませんでした。(関西では菊地より菊池が多いんです。おかげでよく間違われる)そちらにはこういう人はいませんか？

しかし私まで「小人」と思われるかも……

(兵庫県・菊地研一郎)

☞同姓同名ですか……？私が知ってるのは、佐藤健一郎(幼稚園の同級生)と喜久地隆

(小2あたりの同級生。隆は字が合ってるかどうか不明)の二人だけですが。ただ自分の名前って、あまりいいイメージがないんですよ。幼稚園じゃ帰りの順番が大体最後だったし、……名前の字数で帰る順番決める先生がいたんだな。で、大体5字か6字ぐらいでみんないなくなっちゃうし、9字なんてのは↑の佐藤と自分しかいなかったから、これやられると最後になる寸法。先生も「あれまだいるのー？何字だっけー。え？9字？ごめんねー」てなもんで(しかもこれを週一ぐらいのワリでやる)、その日の帰りにはずいぶんスネたものです。今でも自己紹介はまだるっこしい(言い辛い)。アダ名もロクなものがない。「キクチン」から来た「チ○○ン」なんか小6まで続いたしなあ。今は「きくりん」なんてのもある。珍しく気に入ってるうちの一つ「提督」はごく一時的に実在しただけ。「オヤジ」は小6ごろからずっと。高2あたりからは「社長」もできた。ナリが老けてるもんで。そっちの菊地さんは、アダ名にはどんなのがありますか？

それと……「菊池」氏が多いのは、全国的にじゃないかな？家もダイレクトメールは全部「池」の方で来るし。雑誌にうちの広告出しても大概「池」になる。いっそ「池」の方に改名申請しちまおうかなんてことも、よく考えます。理由がしっかりしてて裁判所に届けば、そのあと多少厄介な手続きが要るけど可能ですから……。

注目！ 値上げのお知らせ

今までギリギリの予算編成でやってきた結果、空技廠の赤字は雪ダルマ式に増え、もはや「借金を返すためにのみバイトする」という末期症状を呈しています。給料日直後からの「昼飯抜き」は既に当然のことのようになっていきます。どういう訳か今もって判然としないのですが、「売れば売るだけ赤字が増える」という状況です。計算では全ての経費を入れても、一冊あたり20円はプラスになるはずなのですが……。このため、今回かぎり一切の「読者割引」を中止します。また、これを期に本代の値上げを行います。今度の「13号」から、以下の通りとなります。

本体代金 400円 + 郵便料 250円 計 650円

以上ご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

またもデマか!? 空技廠お茶会企画

3月頃に予定しているバトルテック大会ですが、参加/不参加の本調査を行います。バトルテック参加料金は最低千円です。

しつこいようですが、宿の必要な方は自前で調達していただきます。夕方には終わるつもりですが……。横浜近辺の相場は、一泊二食付で1万円強というところです。

さらにデマか!? 空技廠お茶会企画2

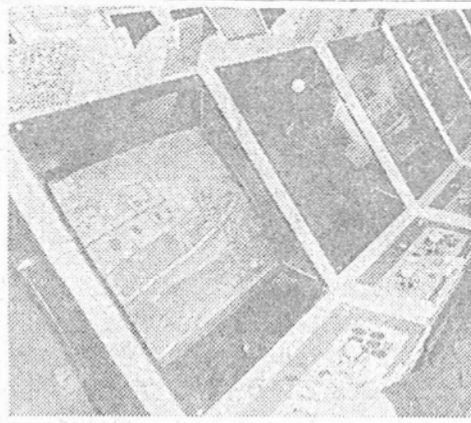
3月下旬(多分)にクレギオン関係のプライベで、また堺に行く予定です。そこで例によって、午前中のみ時間に切って、交通科学館の見学会を行いたいと思います。関西在住の方とは顔をあわせる機会がそうないので、できるだけ予定を空けて下さい。

場外。

「格闘技ゲーム機」で5連敗

悔しい 相手と格闘

傷害容疑で逮捕



ゲームセンターの「ストリートファイターIIダッシュ」。一つ置いて右に同型機がある
＝川崎市川崎区で

川崎市のゲームセンターで高校生に五連敗した同市で、対戦型格闘技ゲーム機「ストリートファイターII」の格闘技ゲーム機は若者の間で人気を集めているが、同署は「画面上の体験と現実を混同したケース」として

(三)が、負けた悔しさの余りに興奮し相手に乱暴したとして、傷害の疑いで川崎署に逮捕されていたことが二十五日わかった。対戦型格闘技ゲーム機は若者の間で人気を集めているが、同署は「画面上の体験と現実を混同したケース」として注目、同種の事件が起きる危険性を指摘している。

調べでは、事件が起きたのは二十一日午後七時二十分ごろ。同市川崎区のJR川崎駅前ゲームセンターで、市内の高校三年生(二)が、対戦型格闘技ゲーム機「ストリートファイターII」で遊んでいたところ、席をひとつ空けた隣でゲームをしていた防水設備工が、通信回線での高校生のゲームに参加した。高校生が五勝すると、防水設備工は画面の格闘技さながらに、高校生の顔に殴るけるの暴行を加え、約一週間のけがをさせたという。調べに対し、防水設備工は「かっかして、ついその気になってしまった」などと話したという。

1992.12.25
朝日新聞夕刊
社会面より。

「ストリートファイターIIダッシュ」は、手元のボタンとレバーの組み合わせで格闘技の技を変えて、相手のキャラクターをダウンさせるゲーム。二台のゲーム機を通信回線で結び、別の台でまったく知らない人が操作するキャラクターと途中からでも対戦できるのが人気の理由だという。ソフトは今年四月、ゲームソフト開発業者の「CAPCOM」が開発。九月末現在、世界中で八万五千枚の基盤が売れたという。

めて聞いた。世界中で大人気で、楽しく遊んでもらっている。攻撃というより、技を楽しむゲーム。キャラクターのしぐさがコミカルなので人気があるのだから。楽しく遊んでくれることを願うしかない。

映像を工夫する必要
稲村博・筑波大学助教授(精神衛生学)の話 刺激的なものでないと若者に受けないので、ゲームも攻撃的なものが人気を集めているようだ。画面上のキャラクターを思い通りに操作できると、キャラクターと同一化して、自己抑制力が弱い人は短絡的に行動に移すことも十分あり得る。もっとひどい事態にならないように、映像を工夫する必要もあるかもしれない。

印刷ちよんと
出るかな?

コミケレポート

去る12月30日、例によって晴海の「冬コミ」に行ってきました。今回は駒大ア二研のスジでサークルチケットが手に入りまして、厳寒の中を長時間も行列するという悪夢のような「ロシア行列」だけは回避することができました。以下、時間を追ってずらずら書いていこうと思います。

まず、家を出たのが6時チョイ前。8時半に正面で集合の予定だったので、余裕を見たのですが……妙蓮寺でいきなり目前で電車を逃す。このあと10分ほど次の電車を待つ間、夜明け前の冷風にさらされていたのでした。もっともその後の連絡はスムーズに行って、現地着は30分も早く。しばらくバカみたいに突っ立って、自分のこた棚に上げて「やれやれオタクどもが……」と既に始まっていた混雑を見物していたのでした。この時点ではまだサークル入場者と一般客がごたませに晴海に殺到していて、それこそ入り口付近は「渋谷の改札」（行列の方向性が整わない）状態だったのです。子連れ的一般客など、「どうする気だオイ」という光景もしばしば目にしました。

さて時間通りに集合、テーブルに本を積み上げます。私の受持ちのテーブルは周囲が「男性向け創作」（いわゆるH系）の「セーラームーン本売り」ばかりで、ハナから不利だったのですが……さらに置いた本がひどい。B6コピー8Pの「個人誌」（と言うと聞こえが言いが、ひいき目に見てもイラスト帳）とA5オフ60Pの「個人誌」。単価はそれぞれ¥100と¥400。オフの方は先輩がかなりキ入れて書いたものだったので、結構見栄えはしたのですが……売ってる途中で気になったので（←無責任）よく見たら、これがロリH本だった。「まーいーか」（←投げやり）と売っていたら、何とか完売に近いところまで行きました。（追加がなけりゃ！）あるいはオマケに付けたコピー本（ウェイトレスが主人公のほのぼのした短編）が効いたかも知れない。因みにNoはター55B。

開場は10時の予定でしたが、私のいた新館1Fは10分ほど遅れました。要は、サークル関係者が他サークルの本（特に別棟にいる）を早く買うべく通路に待機していたのを、準備会の方で排除しようとして、それで手間取った訳ですね。結局排除できずに開場。合図と共に「うわあっ」とばかりに「待機組」がダッシュ。ハタで見ていて準備会の意図をようやく実感として納得したのでした。それとすれ違いに一般客が突入。しばらくの間、制止しようとする準備会員の怒号と、走る靴音あたりは喧騒に包まれました。

さて、「買い」の方ですが、昼ごろになってから時間をもらって自分も行きました。まず最初に行ったのが新館2F、メカ・ミリタリー関係です。これは如実に趣味が出ますが、期待していた新刊（ねこにいプロダクツ）を無事に手に入れ難くクリア。ただ「北総新選組」のは落ちてました。完成し次第通販して下さいね、黒幕さん！もしよければ広告も載せますよ。

次に行ったのはフロアの関係でネットゲーム関係。ここはさすがに売り切れが多く、予定していた蓬莱シナリオ集も一冊しか手に入りませんでした。一番の収穫はクレギオンの「初代ホラ吹き」エド＝ムラサキの同人誌が手に入ったことでしょうか。あと、ここでカルラ・レフォンス先生の（カーライオ＝木村君とスイエン＝真壁さんは知っている）桑原君に会いました。あれだけの規模の集まりで、打合せもなしに巡り合わせるとは、こりゃまた珍しいことではあります。皆さんも行ったときには注意深くあたりを確認するのがいいでしょう。

その次は、コンピューターの方に行きました。例によって「エテルナ電腦工房」の「綾織大佐」（蔵田さんはよく知っている）を攻撃しようと思ったのですが、例によって留守。今回はこともあろうに「ソフト未完成」ということで完全にスッポカしてました。隣でロールプレイングの面白そうなのが手に入ったのは「ケガの巧妙」でしょう。攻撃するだけじゃ能がないので、とりあえず試しに「パソコンRPG」を体験してみよう、ということです。¥1000と比較的安値だったことも影響しました。……ただ、これも帰ってからロードしてみたらやっぱり字が変になって、故障がディスク系ではなく日本語ROMにあることがほぼ実証された訳です。今まではコピーしたのだけでしたから……。という訳で紺野君、今度入試が済んだらぜひ案内頼む。

このあと釈然としないまま行ったのが、東館の洋物コーナー。ロック／バンド系の奥にあるため、私からしてみると「異様」で「イカレ」たエリアを全速で抜けてから、探索を開始することになります。お目当ては「新スパイ大作戦」もの。ワリと良いものが手に入ったのですが……サンダーバードがあるのはわかるとして、どういう訳か「F. S. S.」物も一緒にいました。知り合いにFSSファンがいるのでからかい半分を買って行ってやろうかとも思ったのですが、見てみたらどれも「耽美」な代物ばかりで、金ももったいないので止めました。

最後に回ったのがH本コーナー！ただしH本は眼中になくて（力説！）、「Gun Smith Cats」と「GS美神 極楽大作戦！」のサークルがここに集中して（と言ってもたった4軒）いるからなのですが……。結局、2軒まではバカみたいに並んでいたのが断念。残る2軒はよくよく見たら、どっちもH本のサークルでした。ただポーズなどは敷き写しする際に結構役立ちそうなので（服装、アイテムなどを追加してやればよい）買うことにしました。……別に他意はありません……とか書いても、結局誤解されるんだろうな。

全部周って1時間、再び売り子に戻って4時の閉会を迎えます。アナウンスと共に辺りから拍手が湧き起こりました。この時ぐらいでしょうね、その辺の空気が和んだのは……あとはずっと、強迫観念が渦巻いて他を圧迫してましたから。

で、アニ研内でまとめ買いした本の分配が一部終わった段階で暗くなったのでお開き。タクシーで銀座に出て、天賞堂（鉄道模型の老舗。宝石屋の社長が、趣味と実益を兼ねて本店の2階に店を開いている）のぞいて日比谷線で帰ろう（これだと菊名まで直行できる）と思ったのですが、混雑がひどいのと、他のメンバーと一緒にやってこともあって新橋から国鉄で帰ることに変更。しかしこれも渋滞に捕まったため、運ちゃんの機転で月島に出て、そこから有楽町線で有楽町まで行き、それで日比谷線に乗り換えたのでした。

今回の教訓。

コミケはサークル入場に限る。

文責 菊地

Greatly Thanks to
駒沢大学アニメーション愛好会

不健全

政治、経済、軍事全てに渡って「病んでいる」というイメージを抱かせる国、ロシア。しかしこの国にもコンピューターは確実に浸透してきている。その影響を受け、コンピューターを扱う子供も増えているのだがコンピューターに係るある社会問題が最近目立っている。

洋の東西を問わずコンピューターゲームは人气的だがロシアの子供たちの間に流行るゲームは実写取込のリアルなモロにその行為をボタンやジョイスティックでプレイするボルノゲームだという。コントロールの仕方やボタンの押し方で画面上の女性がキャーとかヒーとか叫ぶというのだが…。

オレの物

総兵力約230万人を誇る中国人民解放軍。これだけ大きい軍隊となると色々問題が起きてくる訳だがその中で兵卒、士官を問わずポピュラーな不正行為が「官給品の私物化」である。

某紙によるとある部隊の個人装備について点検したところ40%の幹部と32%の兵士が防寒上衣や軍靴をなくし、30%の幹部と25%の兵士がナップザック、ショルダーバック、水筒、雨衣をなくしていたことが判明。(家に持って帰ってしまったらしい)また個人装備だけでなく部隊の備品までもが持ち逃げされる始末。もっとひどいのは「某部隊の下士官が四川省西昌に里帰りする際に成都駅で乗り換えをした。そこで鉄道監視員がこの下士官某の荷物から小銃弾450発と空砲弾39発を発見し、これを処分」と記載がある。

しかしこのテの事件は中国人民解放軍では日常茶飯事。以前から問題にされてきたことではあるが、改善の見込みは一向に見受けられない。(高校の持ち物検査を思わせる見出しが笑えた)

因果応報

タンザニア北東部オルティアー付近の教会に押し入って盗みを働いて捕まったサリムー・ハティブー(27歳)は裁判中に脱走、川に飛び込んで逃亡を謀った。しかし哀れにも突然あらわれた巨穴なワニに喰われてしまった。

——— 天網恢恢疎にして漏らさず(老子)

笑う門には病去る？

岡山県倉敷市の柴田病院でガン患者など重い病気を患っている患者数十名に集ってもらい約3時間喜劇や漫才などを楽しんでもらった。被験者の鑑賞前と鑑賞後それぞれの血液サンプルの検査結果はガン細胞を攻撃するナチュラル・キラー細胞の活動が低い人も正常な人もいずれも笑った後では活動が活性化し、免疫機能が上昇するという結果が得られた。

逆に鬱状態にある人は、免疫機能が低下しているという結果も出ているという。

冗談商品

噂であるがカゴメの自販機缶飲料のサイダーが最近静かな話題を読んでいるらしい。中身はごく普通のありふれたのサイダーだがサイダーの缶にどーぶつのサイの絵がプリントされているのである…。

それからこれは某マンガ雑誌に書いてあったことだが業務用野菜切り機に「大根おろし機オロシー」「みじん切りカッターミジン」「電動包丁磨ぎ機トギー」「長ねぎ切り機ネギー」「きんぴら切り機キンピラー(キャベツもあり)」という冗談としか思えない商品群が実在するという。

また直接商品と結びつく名前ではないが、カネボウの育毛剤「紫電改」。頭に塗れば594Km/hの疾風が感じられるような爽快感が得られるとでも言うのだろうか？使用する世代を考えれば購買意欲を向上させる効果があるかも？

DQV

色々話題の多い名物スーフアミソフトであるドラクエ。最新作Vをプレイしたが何だか満足できない。ゲームのシナリオや新システムの導入などで人をゲームの世界にグイグイ引き入れる面白さはさすがだが通常のROMカセットの限界をひしひしと感じさせる作品でもあった。

最大記憶容量が12メガという点。グラフィックは確かに前作に比べ格段に向上したが、それは町や村に目立ち、フィールドは

あまり前作と変わらなかった。(これでDQらしさを表現しているのかもしれないが)12メガというスーパーファミンの中ではそうとう大きい容量なのだがDQぐらいのビックタイトルとなると12Mでも容量が不足してBGM、システム、シナリオなどクリエイター達がそれぞれ熾烈なメモリの奪い合いが制作逸話として残るほどである。そしてROMの容量の肥大化は量産の遅滞とコストの増大を招く。(ちなみに年末に発売が決定したDQVの対抗馬FFVのメモリはなんと16Mである。)

そうなる待ち望まれるのは(毎度のことだが)CD-ROMである。嬉しいことに任天堂とSONYが正式に来年8月にスーパーファミン用CD-ROMの発売を発表。次回作はCDで発売されることであろう。ちなみにCD-ROMの最大メモリは約330Mである。

キジも鳴かずば

スイスのグラウビュンデン州で農業を営むクラウドディアさんはウサギの餌の草を刈るつもりで家を出て自分の地所で巨大な白いホコリタケ3つを見つけた。最大の物は自分の顔の3倍、計14キロだとか。これに気を良くしたクラウドディアさんはキノコを抱えて笑顔の写真をいくつかの新聞社に送り、写真は各紙に掲載された。

しかし同州では「キノコ保護法」が施行されており、毎月十日から二十日までの採取禁止と期間外であっても採取は一人1日1キロまでという制限がされていたため、州警察に御用となってしまった。

定番願望の副作用

女性なら大多数が夢見るスリムでセクシーなボディー。そしてそれを目指してのダイエットはある種の強迫観念と、願望、欲望などが複雑に絡み合って多くの女性を動かさせ、精と財を惜しげなく注がせる。しかし一般的には成功の代償として、失敗の反動として精神にも肉体にも大きく跳ね返る。

ダイエットに失敗したくないという願望が強いとき、拒食症という独特の現代病に身を投じる女性が結構多い。名古屋大医学部が明らかにした調査では女子高生14,000人を対象に治療が必要と判定された拒食症予備軍が千人に一人という結果が発表された。別の調査では意識してダイエット中の人とそうでない人を比較した場合、ダイエット中の方は調査当時は確かに食事

量が減ったが4年後の追跡調査ではダイエットをした人の方がしなかった人より体重が増えていたことが判明。また別の調査では短期間ダイエットに成功した複数の人の骨の組織を調べたところ被験者のいずれもが20代であったにもかかわらず骨の強度が平均40代程度、中には60代と診断された人がいるという結果が報告されている。

羨望業績

景気低迷が続く日本経済。社会人にはボーナスが気になるところである。どこを見回しても不景気で埋め尽くされているのだがTVゲーム界大手セガが発表した中間決算によると売上高1673億円、前年比91.3%増、経常利益83.4%増の273億円と8年連続の増収益となった。

これは海外で任天堂の「Super NES」を上回る人気の家庭用ゲーム機「ジェネシス」(海外版メガドライブ)の販売網を強化し、欧州で3倍、アメリカで2倍の売り上げがもたらしたというもの。また国内ではゲームセンター向けの機器が好調で前年比5割増しとなっている。

確かに最近のセガの躍進ぶりは目を見張るものがあつた。メガドライブではソフトの「ソニック・ザ・ヘッジホッグ(2)」の気合いの入り方、ハードではCD-ROMドライブの「メガCD」の発売とそれ以降のソフトのラインナップ。(まだCDのゲームは少なく、シューティングやアクションが目立つが、今までスーパーファミンやPCエンジンに遅れを取っていたのに対して着実に地位を獲得しつつある。)コナミもソフトメーカーとして参入したことであるし、これからも期待できそうである。

実践

ヨーケット・ピーアンさん(57歳)はバンコク市北方郊外アンソンの農家の庭先でぬかるみに足をうっかり取られて転んでしまった。その時運悪く電流の通ったケーブルに触れて感電死してしまった。

同じ日の後刻、妹のバーンさん(52歳)が近所の人に姉がどのようにして亡くなったかを説明しようとして同じぬかるみで転び、同じくケーブルで感電死してしまった。

航海日誌

菊：これをもちまして新年の挨拶と代えさせていただきます。今年もよろしく。

D：寒い時はTシャツ1枚にB-3をはおると丁度いい。もしかしたら、話の番外篇を次にのせるかも……なんて奴だ畜生

た：手抜きのコピー送るのって悲しいなあ。今度はしっかりかけると良いな

紺：除草剤のCMで「××だけの除草法」と聞き間違えた。嗚呼……

田：この前K君の家にお邪魔しました。愛車の爆走プレリユードでの送迎。案内された部屋は……お金持ちってコワイ……

Crew

編集長：菊地研一郎／編集補佐：宇垣麻美

筆者：長船吉光 紺野紫楼 Danyan=Kizaki

岬当麻／絵：ただのりな ゆきま 孝行始

(脱稿順)

Blowers 第12号

第3巻第8号(通巻13号)

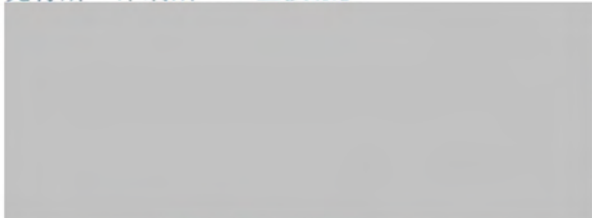
平成4年1月10日発行 代価300円

(送料別)

編集人 菊地研一郎

発行人 菊地研一郎

発行所・印刷所 「空技廠」



！本誌記事の一部または全ての無断使用を禁ず

今月の表紙：— A lovely autumnal day. —

絵：ただのりな

(描いてもらったのは秋口でしたね……)

次号「菊地の10代最後記念号！」は

2月末日発行予定です。

原稿・投稿メ切は2/15(厳守)です。

※郵便事故多発期なので皆さんご注意を。上記までに届かない場合は事故の可能性が強いため、電話・速達等でご一報下さい。

